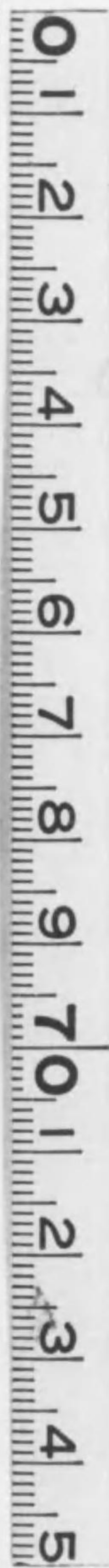


特201-944



1200600347934

297



始



特201-944



200600347934

997



特20
940



月の家著

月日記

八の巻

昭和四年
自九月六日
至九月廿二日





(左)子童白と(右)姫王輪の毫揮師聖郎三仁王口出【白著】

氏の家書

日
月
日
臨

人の家

御所四年
自式日
廿二日
六日



日月日記 八の巻 目次

昭和四年九月

六日	於	高天	關	一頁
七日	於	光明	殿	一八
八日	於	高天	關	二六
九日	於	高天	關	三四
十日	於	高天	關	四一
十一日	於	高天	關	七三

目次をばり

廿一日	於	明	光	殿	二七九
廿二日	於	明	光	殿	二七八

十二日	於	高	天	閣	九二
十三日	於	高	天	閣	一一九
十四日	於	高	天	閣	一二三
十五日	於	高	天	閣	一六〇
十六日	於	明	光	殿	一七八
十七日	於	高	天	閣	一九七
十八日	於	明	光	殿	二一九
十九日	於	明	光	殿	二四七
廿一日	於	高	天	閣	二六三

日月日記 八の巻

昭和四年九月六日

於 高天閣

朝霧は四方の山邊に立ち籠めて肌冷えくぐり秋風の吹く
四方山の深霧南桑一面にいや攪ごりて眼界狭ばまる
銀杏の木の実ばらく落しつゝ音も烈しき初嵐かな

王仁神社建設主唱者山田七平氏今日呉れくゝに訪ね來れり
 明光社月並冠句和歌の卷二十三冊奥書を爲す
 照り曇り定かならねき雨もなく風又死して虫の音もなし
 表門朝顔棚にぶら下る糸瓜に天窓打ちて微笑む
 山田氏の依頼に應じ額面用大半切紙二枚書きたり
 くれくやかせくもろく色々忙がしきかな神に在る吾
 今日も亦呉れくゝに來て吾に會ひ援助々々鳴く鳥飛び込む
 吾着衣所狭きまで相並べ澄月安子氏土用干しを爲す

月並の和歌冠句卷廿二冊明光殿にて奥書を爲す
 黄昏の細雨も晴れて神苑の今宵の踊り案じ解けたり
 若人が踊りの準備忙がしく紅提燈を吊りていそしむ
 二千餘の人集りて神苑にざわめき合ひつゝ、良く踊りけり
 音頭取り聲消えしかと思ふ迄人聲高く踊り狂へり
 音頭取り世話方連に酒辨當ふれまひにけり明光殿にて

神とある身はいつまでも樂しけれ邪神の襲ふためしなれば

野に山に満つる惠もしら雲の餘所に求めて身をや亡ぼす
 如月の空の月かげ仰ぎ見る庭の面高く薫る梅ヶ香
 如月 莊月を三鳥の別院に布袋となりて待つ山の神
 月の内わづか四五度の會見に松風開けば濱千鳥なく
 明光殿百舌の鳴く音に飽きはて、月を三鳥に濱千鳥きく
 天恩郷刻々ふとる蹄の輪君に見せ度く思ふ宵かな
 かをり良き草山谷の松の精見すれば逃ぐる藪の小雀
 丹波の國開けてゆ初めてのの大踊り見し腹合ひし人と
 戀の歌吾書きゆけばそばに居る人の顔色紅となる

秋風に吹かれて首ふる栗の實は我を捨てたる戀人に似し
 コスモスの園に吹き捲く初嵐花の心を白百合の上
 盆踊猫も杓子も南瓜も潮の如く押寄せ来る
 何人も吾女房に勝りたる美人はなしと自惚れて無事
 人はいざ知らず花より團子鼻子持ちの女房吾は好くなり
 海山を遠く隔つる戀人を秋の夜長の夢に見しかな
 ラヂュームのいさを三朝の湯の宿にひたりて詠みし歌枕かな
 望み見る家の棟高く照る月を空に忘れて夜は明けにけり
 愛宕山電燈秘せて秋深し

如月の空に高照る瑞の月
 湯煙を三朝の宿や露深し
 いくさして勝利を神に拜んで
 判らないやうに圓滿解決し
 圓滿に平和を唄ふ踊りの輪
 判らないのが有難く見える
 瑞の神世に現れて玉選び
 月光をほめつゝ清い舟遊び
 酒飲んで酔つてるあひだ天下取り
 まつりごと 神を敬ひ君民一致(冠短句)
 始めでる 犬神業の露捧ひ

しまつてる節々がくると表の戸
 限りがなくれ 坊主の強懸さ
 立つた 母が手を打つ笑ひ顔
 天も地も一度に月は照らして
 珍妙なものを欲しがらる家潰し
 無言にて見惚れてる又迷うてる
 勿体ない元のかゝつた尻を落し
 鉢ヶ岳いっつも負けてる角力取
 見事々々闇の煙火に見惚れてる
 大變々々二號を悟つた山の神
 山一つ忘れて自雨過ぎにけり

男一匹我神國にかくれてる
 光つてる電燈直下の蠅は
 花盛り散つたら良い實結んでる
 たまらない命令々々をふりまはし
 のんびりと顔の持主雲の上
 やはらかに衣をまとふ雲の上
 あつかりと白い浴衣で夕納涼
 来るくくと濱邊に待てば松の聲
 にこくと床の布袋は笑つてる
 鏡見てお龜はいつも腹をたて
 勇んでる弟が天の巻取つて

尻でもない神の子越ゆる大峠
 重なつて紅白の鏡神の前

○人類愛善會福岡支部主催

總裁作品展覽會概況

八月二十七日より同三十日に至る四日間に亘り開催せり。会場は縣商品陳列所にして縣前那珂川清流に沿ひたる宏壯美麗なる洋式大建築物にして交通至便、本會々場には最も適應しき地点にあり。時恰も諸官公衙の正午退廳期間中にも拘らず、同所主任の特別なる計らひを以て、午後四時まで(三十日は午後五時迄)開放せらるゝこととなりたり。

入口にアーチ型大看板を樹立したるは、一入衆目を引きたるが如し。会場正面には、南面して右方に千手觀音の大幅を奉掲し、其の前に白布を以て覆ひたる卓上に、聖師様二代様の

大型寫眞を安置し、左方に國常立尊の尊像、至聖大賢云々の書、並に瓊々杵之尊の御像を奉揚し、其の傍らに數百年を経たる眞柏の大盆栽を置き、一層森嚴の威を加へたり。其他の畫幅樂燒及色紙短冊帖著書等の御作品は、光線及觀覽上の便宜順序等を顧慮し、夫々適當なる場所に掲げ又は定置したり。第一日(二十七日)は拂曉來の驟雨残りなく晴れ、新秋の氣天地に溢れ實に絶好の展覧日和となれるは、一に神助たる事を感謝せざるを得ざりし。開會に先だち山口別院幹事は、本會に參與せる會員を集合し、一場の心得を訓誨し各部署に就かしむ。入場者に對する説明は、専ら山口幹事之に當り其他瑞祥愛善會の各支部長信者氏に代つて奉仕せり。入場者は多くは相當具眼の人、又は専門畫家等にして、就中畫家嘆稱の聲は、吾人をして更に瑞雲聖師の偉大さを如實に悟らしむるものありたり。

試に其の一二を例示すれば

甲 (千手觀音像に就て) 其の線の恰も水の低きに就くが如く、最も柔に、最も自然に、一点

滯滯の跡を見出す能はざるは、吾人數十年の修練をなすも尙且つ能はざるべし。所作時間僅に三時間と稱ふるが如きは、運筆の神來的なる事によりて、容易に肯定し得らるべし。神筆の動きは、此畫或は一時間乃至三十分間に成れりと言ふと雖も、吾人は毫も疑を容るゝの理由なし云々。

乙 畫流或は芥子園あり、江戸南畫あり、狩野派あり、鳥羽繪あり。而も何れも其の格に捉はれず、超然雄飛せる處、到底同一人の作と肯定するもの無からしむ、而も千手觀音の神韻鏗渺たる大作の跡を拜して、神人ならではてふ觀念に立ち、初めて爾かあるべきことを諾かる云々。

丙 大原女花賣下阪の圖、赤禪大黒の船夫の圖の如きは、局所々々に非常なる力籠りて危げなる姿態が支へられたる点に依つて、全体の均勢が保たれ居るは、到底凡手の企及すべからざる所云々。

丁。色紙未点式山水(瀧)二点何れも瀑下岩面に水勢横様に迸り流るゝ處自ら深々として聲あり。而も描法全然古格を脱して、吾人専門家と雖も到底其の秘繪を窺ひ開くを許さず云々。

専門家以外の語言

人間の鑒格は藝術を通して初めて窺知するを得べし、王仁先生が斯くも偉大なる靈性の特主たることは、此度始めて一斑を知り得たり云々。

千手聖像の前に立ちて發動せる人

第三日の午前十時頃身粧卑しからざる一見四十歳前後の紳士、悲常なる興奮状態にて聖像の前に立ち大聲疾呼して曰く『大本教は斯ゝる嘘偽を以て世人を欺瞞せむとするか、自分は繪畫には相當の心得あり、陳列の作品は何れも別人の作品にして、殊に此の大作の如き僅に三時間を以て出来上りたりなどは、九州男子を侮蔑するも甚し、速に全部を撤回して我面前に謝罪せよ』と怒號し、多數觀覽者其の周邊を取巻き之に共鳴するもの加はりて、事態不穩なる

を以て、山口幹事は現場に臨み言向け和はさるゝも、彼益々暴言を放ちて去らず。將に背後の觀音聖像、並に樂燒等に危害を加へむとする有様に、會場の秩序亂るゝを懼れ、森岡支部長は狂人の所爲と見て、別室に誘ひ説明を加へ、尙山口幹事より更に慰安を與へられ、遂に他日參禮を約して、辭去せしめ事無きを得たり。聞く所に依れば全人は久留米市の資産家に於て、慨世の餘り時々神憑状態に入ることある由。

入場者は第一日四七九人、第二日五七五人、第三日六一〇人と進増の趨勢を示したるに最終日閉鎖の振鈴と同時に綺切りたる數を検すれば、前日より寧ろ減少して、而も我大本に重大なる因縁を有する神數五六七人なりしには、一同今更乍ら不可思議なる神慮に驚嘆し合へり

當地新聞社の聲援

福岡日々新聞及九州日報共本會開催の記事を掲げ、殊に九州日報の如きは、會場の状況を撮影、紙上に掲載し尙作品に對する感憤の記事を掲げたり。

閉會。

新秋好晴に恵まれたる會期四日間は茲に日出度閉會を告げ、森岡愛善會支部長及び山口幹事の挨拶後、聖像前にて一同記念の撮影をなしたり。

以上

人類愛善會 福岡支部報

附記

觀覽者中發動せる人ありしは前記の如くなるが、當日午前十時頃一羽の燕本會場内に飛翔し來り、場内を廻ること幾數回にして森岡支部長の邊りに落ちたるを以て、山口幹事はれに鎮魂を興へられ、該燕は終日支部長の掌中に在りて、安々と眠るが如くせり。全支部長歸宅後室内の植木鉢樹に止まらせたるに暫くにして飛翔し始め、室内を廻ること數回、外へ飛去るに際し一本の翅の羽を落としたり。之に我が日本の紋章あり又奇と云ふべし。

當夜は近郊大井神社の境内に豊年踊の催しありし爲人出を氣遣ふ者もありしが、意外にも昨夜に劣らず、踊子千餘名見物一千人餘にして大盛況裡に午後十一時三十分成規の通り切り上げ、無事二日間の大舞踊も完了せり。惟神靈幸倍坐世。

音頭取り順番を示せば左の如し。

- 一、日吉丸 龜岡町 田畑丑之助、北嶋吉之助、達富政一の諸氏
- 二、安達ヶ原 鹿谷 竹岡晋一氏
- 三、壽司屋 龜岡町 福井宗太郎、田畑丑之助兩氏
- 番外朝顔日記 龜岡 北嶋吉之助、田畑丑之助兩氏、

- 四、全日記 谷口丑太郎、高橋駒吉、一谷虎吉の諸氏
- 五、一ノ谷 原 山内爲次郎氏
- 六、梅由 龜岡町 谷口丑太郎、松岡久吉、達富政一の諸氏
- 七、朝顔日記 西別院村 犬甘野 笑路の人々
- 八、安達ヶ原 鹿谷 竹岡晋一氏
- 九、八百屋お七 旭村 人見惣次氏
- 十、廿四孝 龜岡町 谷口丑太郎、高橋駒吉の兩氏
- 十一、須磨の浦 柏原 山内藤次郎氏
- 十二、埃り町き 龜岡町 高橋駒吉氏
- 十三、玉藻前 全上 谷口丑太郎氏
- 十四、江州音頭 全上 達富政一氏

- 十五、一の谷 龜岡町 田畑丑之助、山内藤次郎、北嶋吉之助の諸氏
 - 十六、須磨の浦 全上 谷口丑太郎氏
 - 十七、壽司屋 全上 北嶋吉之助、田畑丑之助、谷口丑太郎の諸氏、
- 當夜は穴太の連中は大井神社に引かれ來らず。却つて靜肅に踊り上げたり。
- 終了後明光殿にて山内藤次郎、北嶋吉之助、谷口丑太郎、田畑丑之助、松岡久吉、高橋駒吉、畑清次郎、達富政一の諸氏に對し慰勞の爲辨當酒等を出してねぎらひたり。

八日 五日 日 田光 畑

九月七日 於 明 光 殿

明光殿朝起き見れば神苑に雨しとく、と降り頻り居り
窓を吹く風冷え渡り伊豫絣浴衣に着換へ一日を送る
大本へ二代は急ぎ歸りけり十一時すぎ龜岡發にて
午後の四時井上總裁和衣の綾部をさして歸途につきたり
景品用短冊六百五十枚明光殿にて書き終りけり
牧野氏と支那に出張せんとして國分義一氏今日出で、行く

控訴院へ民事に就て出頭せし富澤辯護士歸り來にけり
大阪ゆ吉野時子氏詣で來て味の佳き壽司贈りけるかな
アジア洲神の御國の手に入りてみるくの御代を樹てし夢見し
神の代となれば内外の人草も睦び親しむ心の底より
小夜更けて友と二人で街行けば人影淋しく電燈かすけし

◇九月七日 中外日報所載記事

大本歌出口氏の

土地買収計畫

大本教の出口王仁三郎氏は最近大阪の今北治作氏と謀議し、奈良縣の某地點に於て土地を買ひ占め、例の大本教別院を建設すべく計畫中であると。

◇九月七日 太平樂新聞所載記事

醒めよ町民眠るな町民

時を告ぐ鐘の音を聞け

我等は今！何を爲すべきか？

我等は何を見て、何を學び、何を教はつて、果して今、將來何を爲すべきか、我々の祖先はあまりに冒險好きであり、あまり無頓着で責任觀念が薄弱であつた。

反面それは平和に慣れた純朴を讀へるに充分なものであるかも知れない

併しそれは副作用であり、一ツの表現であつて、總てを動かす何物ではない

我々の祖先は人を偽る事を知らず、又偽られる事を知らず、偽りのみの世界に生きた經驗が無かつたからである。

過去は過去として、現在に於ては過去に於ける美しい魂も尊い魂も何等の價値も反響を持たない。唯破壊と建設の中に無意識のまま、綴られた『過去』の一頁に過ぎぬ。

即ち春の夢は私の夢に遷らんとしてゐる。

併しそれが好いではないか？

凡てが平和に暮れ純朴に育ち、汚れぬ魂を培ふ事は好いではないか。

さうだ、必ずしも悪い事ぢやない。好い事には違ひないが、今その好いと思つた事、我を完全に價値づけ守護しようとした勞力が、やがて根底から破壊され、裏切られ、奈落の底に蹴落され『卑怯者、裏切者、人非人』の言葉と變らねば結構だが、併し世の空氣は斯うした人々の胸といはず背といはず五臓に迄接近する事を喜び容易である。

必ずや純朴で、従順に慣らされた人々はやがて我無責任、無感心、無警戒の『無』に對して、己を嘲笑する時が来るであらう。

必ずや来る。五年と云はず三年と云はず、嘲笑以上の苦痛を味ふ時が来るであらう事を斷言するに躊躇しない。明かな事實は戦ふ勇氣も、武器もつき果てた頃一人二人と順次襲ひ掛つて来る事だらう。

疑はしい、併しこの疑はしい時代は未だ安全であるが、さりとて疑問の時代は即ち生きる上にかつて決定的な斷言の二字を連想、警戒の一步を踏み出す時である事を忘れてはならぬ。即ち危険來の前提唱のものであるからである。

我々は今や豫期しない、百夢想だにしなかつた危険地帯に一步々々足を進めつゝある事を知るであらう。

『京都綾部町』だけでは現在の綾部町は我々の期待を充たしてくれぬかどか疑はしい。

一定の型？ 一定の器に盛られた水は器以上の何物でもない。

今日の此の綾部町を形造つてくれたのは即ち都是に違ひない。大本教の力

に與かつた處もあらう。

併しこれは現在の綾部を綾部町たらしめたもので、綾部町を綾部市たらしめるに充分な活動力を包持してゐるが、然し郡是にしる大本にしる、些少の力はあるとしても、今後の綾部町を何の程度迄後援し支持し得るか、甚だ充たされざるものがある。既に大本教にあつては其本部を龜岡町に移す傾向、世上説を通じて明な事實の如き觀を強ひられてゐる。

△

醒めよ町民、眠るな町民、時を告げる鐘の音を聞け、我等は今何を爲すべきか、我々の活動期は今や萬餘の難と、丈餘の波瀾を以つて、目前に轟々と迫りつゝあり。

では何を武器に何を旗幟にこゝに此難城に立籠りて戦闘を開始すべきか？

曰く熱と努力、公正嚴明、文化の波瀾、欺かれ易かりし、善良を善良なる偽り者として町を擁護し建設に向つて不斷の活動を開始すべきである。

偽る者とは誰か？

綾部町の平和を素し自治の運用を悪化せしめ、民心を常に口頭毒舌に依つて威怖せしめ、良民の愚昧を餌に、自己の評価を高く價值づけんとする者即ち之である。

町民起ちて武器を振ひ見つけ次第に綾部町外に驅逐せよ。さなくば綾部町は永遠に暗である。

九月八日 於高天閣

くもりたる朝の町をたきりつ、月光寮に今日も出で行く
月光寮窓明け見れば圓通寺和尚が讀經の聲の高きも
鐵外氏がのりばりをせし絹本に向つて筆を揮ひ出したり
七時間身もたなしらに揮毫して漫畫十三書き終りたり
月光寮筆とり在れば京都より涙骨來るニ電話か、れり
雨そほつ町を高下駄うがちつ、からかさ、して神苑に歸る

京都市の中外社長涙骨氏岡田氏來りて吾を待ち居り
月明の館に涙骨岡田氏と雨の庭見つひる飯をなす
高天閣應接室の椅子により半日愉快に時事談をなす
昨日より參郷したる大和博士いごまを告げて黄昏歸京す
たそがれてこほろぎ松虫鈴虫の共鳴く聲の清しき高殿

○

すまの浦波にかゞよふ月かげにあこがれ戀女房の尻馬
磨が尻まくつて臭い尻を放れば飛び上りけり雲の上人

古の袖の文句を見ればを太ふ九の吾等も悲觀したものでなし
福六女天窓短くかみ長く尻又ながし軸ものゝたけ
朱ぬりの盃抱へ折助が待間の藝當に鯨飲をなす
顔赤く盃赤く唐辛提燈赤き玄關折助
月のなき夜は街燈の光りにてひそくと讀むラブレター哉
何も鴨籠馬の熱にうかされて心の駒もとび出しけり
音響の琵琶の湖みづうみかるく共引かぬは戀の日本益良女
内しように見える花の露を屏風ごしにうかゞふお龜の呆れ顔哉
隣室のさゝやききつく氣にかゝりお三はそつとカーテン捲る

姿見に左右の身振寫し見れば氣にかゝるかな挽白の尻
おたふくで誰も惚れてはくれないのきぬく縁に立ち姿かな
月高く夕べ涼しき神館に君待ちあれば虫の音淋し
朝夕は冷々として息白し早松茸の出づる時來ぬ
神苑の果の實み梢さへに重なりて秋は更けたり月影高し
朝夕に風冷々と肌寒く倉に納めし蚊帳の果かな
藝の花白き河原の洲に咲きて霧立ち上り秋去りにけり
朝夕の風の冷たき仲秋に食らふ西瓜の味の無きかな
あらゝぎに混りて茂る穂芒の許々多孕みて秋づきにけり

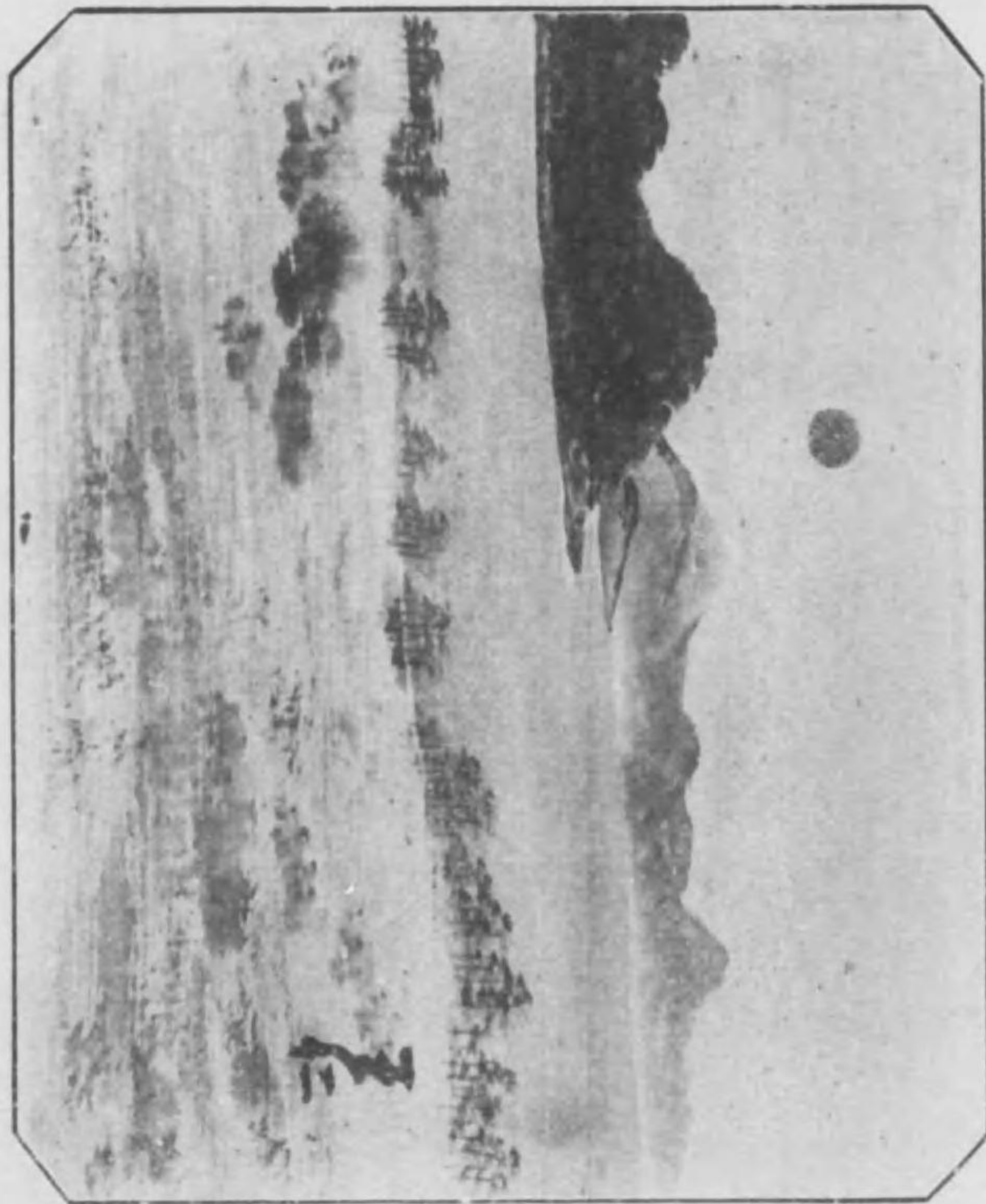
秋日和幾日續きて吾居間にさし込む朝日の深くなりけり
端居して天の川原を仰ぎ見る秋の夕べや馬追の鳴く
星高く澄み渡りつゝ夕風の身にしむ頃となりにけるかな
吾坐せる疊冷たく覺ゆなり盡もこほろぎ聲頼りにて
野路行けば小溝埋めて蚊帳吊草心もなげに赤らむ秋かな
村々の低空煙り匂ひつゝ一直線に流るゝ秋の夕
蚊の聲の悲しく細りて背戸裏のコスモス一輪匂ひ初めたり
獨り寝の秋の夜長にくつわ虫ひたなく聲に眠られぬかな
夜淺き敷布の上に寝轉べば枕に涼し風の聲あり

蒸し暑き空氣はいつか逃げ去りぬ吾高殿に初嵐して
庭の面の笥の水の音湧えて秋の夜長をかこつ獨り居
玻璃戸ゆる風の音絶えて地の上に霜おく夜半の淋しき獨り寝
秋の夜は樂しかりけり文机に向へば浮ぶ若き日の戀
満月のかゞやく夕べ町人の思ひ月の輪なして踊れる
眞晝間の暑さに秋の忘れられて草路行けば汗にじむなり
襟葉の棺は靜かにゆるぎつゝ澄み渡りけり秋の天空
青葉もむ嵐の脚の白くして處狭きまで青柿落ちたり
碁を囲む手さきも暫時たゆたひぬ秋吹く嵐の音の高さに

湯に入りて髭を落せき怪我も無く今日こそ安全剃刀なりけり

○ 展覧會概況報告

八月三十日晚十時半山口宣傳使福岡より來倉、巖に小倉分所、若松、戸畑、八幡、門司支部協議の上、聯合にて小倉商工會議所階上に於て、八月卅一日より九月二日迄、毎日午前九時より午後十時迄三日間開催、第一日定刻よりぼつ／＼入場者あり、感歎して歸る者引きもきらず。正午過ぎ沛然として雷雨あり、北九州としては五十幾日目の喜雨に遇ひて、愁眉を開く。第三日目の未明又々雷雨あり、今更ながら雷さんの齋の御神徳を一同稱へ奉る。今般特に聖師様より北九州へと山水漫畫合せて十二幅、久富氏御貸下を受けて歸らる。會場一層賑はしく御生誕祭直後全部で五十九幅なりしも不思議、展覧者に非常の感動を與へ呼々と讚歎



山口聖師揮毫の山水

詞の聲にて場内を去る能はざらしむる有縁、山口宣傳使の熱心なる御取次に尙又感動者多く中には早速参拜を約せらるゝ方もあり、愛善新聞の無代紙受付數二二八中には京都横濱より旅行來倉中の方もあり、入場者としては八百六十五名なりしも、當地方として近來になき豫期以上の好成績を、御神助により擧げさしていたといふ事を御報告申し上げます。

追伸 山口宣傳使の連日御苦勞を御禮申し上げます。

小倉市大阪町二

宇都宮彌治代西村

人類愛善會本部御中

○
鶏頭の花褪せにけり神苑に連日降れる秋雨のあと
風早の天恩郷に秋さりて夕顔棚の下蔭涼しも

葉鶏頭の上葉紅々燃え出で、下葉三つ四つ枯れ朽ちにけり

九月九日

於高天閣

家鶏の聲清く響きて風早の天恩郷は明け放れけり
七面鳥聲いやらしくカラ／＼と嘲ける如く笑ふ朝空
高天閣起き出で見れば庭の面に雨蕭々／＼降り續きあり

穴太より上田神職訪ひ來り登記の話定めて歸れり
四方の山白雲低うたれこめて非時神苑に秋雨のふる
蠶蠶神苑の彼方此方隈もなく啼き渡りつ、夜は明けにけり
終日を鳴きつゝ暮る、草雲雀聲聞く夕べに寂しみの湧く
盂蘭盆は早や過ぎぬれき鉦た、きまだ義に潜みて謳へり
輪轉機に觸れて危ふく佐藤青年は右の腕をば傷つきにけり
急報に由りて直様天聲社に到り傷所に鐵魂を爲す
一同は戸板に載せて龜岡の外科醫の許に送りてぞ行く

玻璃窓を透して映ゆる葉鶏頭の花美はしく黒き蝶舞ふ
 神苑の雁來紅の色深く燃ゆる朝に立てば清しき
 秋深く天恩郷に流れ来て紫苑の花は匂ひ初めけり
 神明館庭も狭き迄秋萩の花匂ひつゝ小雨降り頻く
 萬壽苑そゞろ歩めば秋萩の梢に小さき花ほころべり
 細繩を以ちて縛れど糸萩の梢は猶も雨に枝垂るゝ
 人通り繁き神苑の道の邊によこれて咲けるあはれ白萩
 ほつくと散る花もあり未だ咲かぬ梢もありぬ神苑の秋萩

秋萩の雨に頭を地に置きて露のしたゝる風情床しも
 天恩郷一つ残して雨雲は霧の丹波を深くとさせり
 霧の海波に浮べる花明山の月照山はノアの方舟
 雨そほつ神苑に生ふるコスモスの梢の露の玉にうたれつ
 花はまだ見えぬ神苑のコスモスに玉をかざして露の花咲く
 あちこちとまだらに咲ける秋萩の梢に黒き蜂の來て舞ふ
 雨の音風の響きを聞き乍ら今日一日を骨休めする
 雨そほつ今日は小猫も家にて追へきもく股くどりする

アカシヤの上枝の緑色深み秋風たちてこほろぎの鳴く
たわくし松の若枝をゆすりつ、秋風たちて雨そほつなり
わが植ゑし庭のひもろ木秋たちて心おかなくなりけるかな
去年の今日北海道の北の果根室の支部に安居せしかな
鳳聲氏出口教祖の木像を刻み終りて聖地に向へり
無花果の實りたるさま乙女子の乳房にも似て愛らしきかな
神苑の栗の梢に房々実の下りつ、風にさゆる、
別れ住む妻を思ひて寝ぬる夜に聲をそろへてかなぐの鳴く

薄雲の低く地に垂る夕暮の秋は淋しく心しづけし
黄昏の秋の草野を一人行けば虫の共鳴高くも淋しき
向つ山松の木下に二人人立つ見えて淋しき秋の夕
曼珠沙華咲きほこりたる野の路を見返りもせで乙女子通へり
秋寒き蝦夷の嶋根に道を布く友の身思へば涙ぐまる、
極北の寒さまびしき滿洲里にいそしむ宣使を偲ぶ秋の夜
降りつゞく秋のこの日を吾妹子は聖地に在りて何を爲すらむ
並み立てる四方の山々雨煙る夕暮淋し風早の郷

こほろぎはちぎれ／＼に啼き居たり月を包みて雨の降る宵
たそがれて中野氏夫人敬子氏を伴ひ高天閣に上り來
夜に入りて雨まだ止まず神苑に聲きり／＼すこほろぎの啼く
敬子氏は桃の香爐一組を贈られにけりいと珍らし
初秋の風そよ吹きて神苑の櫟の梢は色まさりゆく
やがて散る銀杏の梢と知りながら木かげに立てば物思ひもなし
春陽亭秋月亭の相並び立つ日の高臺偲ぼる、かな
高臺の夕べ愛宕の山見ればケーブルカーの電燈また、く

九月十日 (舊八月八日) 於 高天閣

二百二十日風の厄日も明日さなりあたりざわめき朝雨の降る
四方の山雨煙りつ、庭の面の植木の梢に風の聲あり
草雲雀馬追かな／＼きり／＼すこほろぎ樂を奏づる朝かな
草の花咲き亂れたる神苑は朝な夕なに秋虫の啼く
風早の天恩郷の朝ほらけ風立ち初めて銀杏の落つ
文机の上に着きたる新聞紙舞ひ躍らせる朝風かな

庭の面に朝の嵐を受けながら危ふくさがれり苦瓜の鈴
檜の幹にからみて實のれる苦瓜の赤らみ初めて秋は更けたり

本日九州小倉市の小山田太湖氏、七十三歳皇室中心頌徳會長より左の詩送り來る。

観大本出口大人作品展覽會

展覧圖書韻入神 四通八達是伊人
初知不凡天才異 造想東西少等倫

白萩の花の盛りに月冴えて風かをるなり秋の夕暮

澄みわたる仲秋の空に照る月の高き姿を仰ぎ見しかな
心行くまで讀みふける神ふみの恵みは秋の長夜の賜物
秋雨の廻れる山に聲をのみ落として渡る雁の一枚
神苑の彼方此方に菊植ゑて我大君の萬代新らむ
書に歌に句作と筆を馳せ行けば秋の夜長しと思はざりけり
數萬年の御國の歴史繕きて思ふは國の行く末なりけり
内閣の顔は變れど如何にせむ神の御國を知らぬ司に
秋の夜のすみ渡りたる大空の月はかすみて東雲にけり
柴の月の垣根に宿る月かげは雲井の上も隔てざる可し

吾愛に馴れしか空飛ぶ小鳥の机のあたり離れざりけり
日本史を讀みふけりつゝつくくと御國をしのぶ秋の夜半かな
吾が植ゑし庭の常磐樹年を経て榮ゆる見れば樂しきろかも
サルビヤの色赤々と池の面にうつれる見れば心若やぐ
汽車の行く音を消しつゝ雷の西より東の空に鳴り行く
久方の御空を渡る望の夜の月も波間に浮かぶ御代かな
早瀬はやせの瀬戸の波間に照る月のかげをし見れば吾身似ばゆ
大公孫樹茂れる下に只一人待てども遅しのち十六夜の月
人の聲さゝやく如く聞こゆなり笈を落つる雨だれの音

雨と風一度に迫まる神苑の朝の空は静こゝろ無し
緊縮か將た金縮か襟縮か只謹肅で成行きを見む
經濟界の痛を醫せんと金解禁心臓まひ痺ひに氣付かざるらし
秋深み濠の水面をとざしつゝ空場あきばもしらに落葉散りしく
紅くあか青く黄色くはゆる秋山の紅葉の色のなつかしきかな
秋雨の晴れ行くあとの空高く澄み切る風の肌寒きかな
庭の面に紅葉色付き秋山に茸の生ふる頃となりけり
風波のよせては返す琵琶の湖うみの砂濱清く秋の月照る
吾庭にかをる五色の菊の花友と見るこそ樂しかりけり

紅葉の紅きも神の大道行く人の心に及ばざるらむ
小夜嵐止みたるあとの朝明けの庭は紅葉に埋まりにけり
龍宮の宮の棟まで届くかと思ふ斗りに浮ゆる月かな
雨けぶる保津の谷間を一筋の筏は霧を別けて流るゝ
穂芒の嵐に堪へて招くとも歸らぬものは奥津城の母
神苑の草に潜みて鳴く虫の枕はなれぬ秋の夜半かな
大公孫樹梢における霜ふみて聲高々と鶴鳥の鳴く
秋草も枯れ果てにけり町人の夜な／＼踊りし足の荒さびに
天は裂け地は沈むとも月の宮珍の寶座は動かざる可し

常永の國の榮えを祈りつゝ、朝な夕なに神言を宣る
嵐山紅葉の便りは聞きながら行きて眺めん暇なき吾かな
東の峰の八重雲押し分けて昇れる月の影さやかなり
大魚小魚そこに沈みて水の面に紅葉の浮かぶ秋の日寒し
小夜嵐吹きしく庭に立ち出で、月をし見れば微笑みてあり
園見坂コスモス匂ふ道行けばあわたしくも蛇の逃げ行く
神苑の堀に浮べる水鳥の羽音を聞かぬ夜半ぞなきかな
温室の小箱の中に雛鳥のチゝと鳴く聲聞こゆる夜半かな
一本の百日紅の枝にさへ花の盛りは區々なりけり

人々の紅葉に酒を汲む見れば吾れ訪ふ秋も賑やかなりけり
翼あらばツエ伯鸞の後を追ひ慰問なさんと思つても見し
神苑の池のおもてに照りはゆる楓は散るとも水に浮かばむ
小夜更けて寝られぬ儘に思ふかな吾道の友の旅の憫みを
靈幸ふ神の守りの無かりせばわが日の本は安けからまし
今の世に時めく人の大方は神の大道も白雲の空
神の教擴めながらに敷島の道踏み分けむ奥の奥まで
教祖神書き遺されし神書見れば昔偲びて涙溢るゝ
國祖神高き稜威のかゞやきて日々に榮行く大本の教

千早振神の祭りを第一に勤むる家は永久に榮えむ
三十年の昔大道に盡したる友おもふかな秋の夜長に
神苑の貴の菊花を手折りつゝ奥津城にます母に捧げむ
秋の日の澄み渡りたる空の海を渡らふ月の影は冴えたり
愛岩山ケールアルカ一の架りてゆ老いの足にも踏みて見しかな
小夜嵐静まりはてゝ神苑に曉告ぐる鶯の音冴えたり
天地の高き恵みに吾れは今一人立つ身も母の戀しき
まめ人の朝な夕なに眞心を盡すは神の力なりけり
雨につけ風につけても百姓の田の面に心離るゝ事なし

敷島の 大和心に 山海もまつろひ来る 貴の 言靈
思ふ 事口に 盡せぬ 眞心は 忽ち色に 現はるゝなり
言行心 一致せざれば 大本の 教傳ふる 事は 叶はじ
身はたとへ 富貴の 峰に登るとも 谷間の 清水汲みてこそ生く

○

芙蓉坊 吾れを 隠世に 導きし 靈地の 登記無事に 濟みたり
風の音 高く響きて 虫の音も かすかになりぬ 天恩の 郷
負傷せし 佐藤青年 神徳に 追々 快氣と 報告来る

菓子林 檜有の 味靈子と 數々を 負傷見舞に 贈らせにけり

○

歌も句も 只讀み安く 誌すこそ 風雅の 道の心なりけり
世の中の 凡ての事に 心よせて 昭和の 御代の 民とこそなれ
名位福たとへ 世人に 劣るとも 誠の道に 富む人とならむ
天渡る 月日の 脚の速ければ 片時の 間も仇に 過しぞ
秋萩の 梢さゆると 良く見れば 花の木蔭に 遊ぶうない兒
神苑に 花はかをれど 月照れど 心は遠く 西伯利亞に 飛ぶ

吾爲さん事の多くて秋の夜も明け易きまで忙がしきかな
秋の夜の御空に澄める望月のまるき心を持たま欲しけれ
昔の生す巖に生ふる常磐木の松のこゝろを持たまほしけれ
人の世は皆何事も安らげく思へば事の成らざるは無し
ともすればあらぬ方へと移り行く人のこゝろの恐ろしきかな
人の世は日々の務めを怠らず樂しく暮せ神の坐す代ぞ
己が身を獨り立つまできたひつゝ世のため人のために勤しむ
鬼大蛇悪魔も愛の光には尾を振り頭かたむけ服従ふ
夏の日を力と頼み終日ひねりを備く蟻の平安なるかな

西王母桃林の桃唄ひし夢の覺めたる後も口に蜜あり
外國の諸たの教にいや優り生きたる教は伊都能賣の遣
荷車の重きを曳ける賤の男の兒にやあるらむ先曳なせり
幾百萬人の心を生かすも誠の愛の力なりけり
見る人も無き山里の賤が軒のきも春さりくれば花匂ふなり
君が爲御國の爲に企てし大神業のまに／＼過まむ
心安き所得たりと鶴の聲もさやかに唄ふ神苑
荒御魂勇氣付けむと高熊の峻しき山に神子みこと登りし
雨風の荒ぶ度毎こゝろをば動かす人は事成し遂げす

若やぎて勇氣百倍此の頃の吾身老いしと思はざりけり
野に山に殿と瑞との◎の種を蒔き擴めなむ神に在る身は
現^{うつ}そ身の人の心の果敢なさは事ある時に周^{あつて}章ふためく
いそがしき道の司に住むとても親に仕ふる暇はありけり
親々の名を後の世に現はして世を救ひ行く人は神の子
右左曲の窺ふ神國を永久に守らへ日本大丈夫
思はざる事次ぎく^くに起れども善意に取れば力とぞなる
何事も心を配り過ごしなば却つてその身あやまつ事あり
一日を三月以上に伸ばさんと吾は御國の爲に働く

まめ人の心一つの大本は神の誠の光ればなりけり
天地の神は吾身の朝夕に御國につくすを見そなはすらむ
大本の誠の道を踏む人は闇の浮世も安く渡らむ
吾み魂光り薄^{うす}しと諦めて研かずあれば遂に朽ちなむ
事のある時こそ吾身安からん心ゆるぶは災厄の本
◎の神の瑞の御教は靈魂の曇れる人の燈火なりけり
信徒の心合はして道のため盡すは御國と大君の爲
四方の國神の御國の日の本を憶^{おぼ}憶^{おぼ}るまで道を傳へむ
吾思ふ事の半ばも成らざれど世人は成功したりと貧むるも

何事も心一つの持ちやうで高くも登り低きに落ちむ
玉鏡前にし立てば自ら足らぬ吾身の耻らひの湧く
愛善の熱に燃えたる宣傳使選りて地上に御教聞かむ
日々の業省みするも程々に爲さずば却つて迷ふものなり
日の本は神のます國守る國神を齋かふ事を忘るな
吾身魂清く修めて世の人に大道傳ふる人は神なり
久方の神の大道を進む身は闇の浮世も危ふき事なし
外國の長所を納れて吾短所補ふ御代は榮え久しき
人の上裁くを知りて吾身をば省みせざる人の多かり

雪に折れ嵐に倒れて生ひ立てる松こそ日本男子の典型
安らげく見えて行ひ難きものは口と心の一致なりけり
相共に救ひ救はれ助け合ひて此の世の中は平安なるべし
天地の神の御前に愧ぢざるは誠の道を歩む人なり
村肝こむぢの心の誠こもりたる詞ことばは終世忘れぬものなり
曲神の猛り狂へる世の中は神を力に進むべきかな

○
夕ゆふさりて安生館あんせいぐんを訪問し總理大人見舞ひて歸る

神苑を舟月伴ひ巡りつ、神明館に休息を爲す
大祥殿夕の拜禮に行く人の下駄の音高く風さえ渡る
秋雨は降り止みながら神苑吹く風の音高き夕べの空かな
東より米倉嘉兵衛氏訪ひ來り午後の四時發汽車に搭せり
智照館工事は遅々として捗らず心短かき吾不快なり
是からは田舎大工は雇はぬと心短かく思ひ見しかな
スタンドの下にて歌を書き行けば小さき蝶來て鼻に飛び入る
夕暮の天恩郷をさよもして大祥殿に祝詞高宜る

信徒の聲を揃へて祝詞宜る大祥殿の豊なるかな
天恩郷木の葉さやぎぬ風吹きぬ暗き現世の状のうつるか
草雲雀こほろぎ啼きて天恩郷夕べの苑に風すみ渡る
神明館窓を開けば停車場馳せ行く車の光仄めく
窓の内ゆ襪透して向つ山見れば名畫の額に似しかな
秋深み天地涼しくなりければ今日より始めて衣重ねたり
神明館一つのこして闇の幕雨の神苑を包みけるかな
大祥殿神書讀む聲途切れく共響きつ、雨風しげし

汽車の音天恩郷をきよもして火光一條闇を縫ひ行く
濁み聲を張り上げながら物語讀み行く夕べ風の音高し
山野皆闇の張に包まれて電燈まばらにかゞやく南桑
信仰の友の集へる神明のやかたへ引かれて入り来る大山
眼に合はぬ眼鏡を借りて新聞紙讀み行くうちに痛くなりたり
日に月に若くなり行く吾身体萬里雄飛の神意なるらむ
六十の坂を迎へて何故か三十年届かぬ吾心地かな
三十回年をほかして今年より二十九歳の若者とならむ

二十九で子の子二人を持つ吾の心の駒の健やかなるかな
身も魂も共に二十と九つの吾西伯利亞に雄飛せんとす
西伯利亞の嵐は如何に強くとも言向けて見ん神のまに／＼
更生の秋の夕べに天地もゆるがむ斗りの雄圖夢見る
地の上の安き世なれば吾魂のしこの荒野を駆けるべしやは
廣袤千里醜の荒野に非時の花咲かせんと雄たけびの吾
千年の齡ひはとても保たねき吾萬代の神業に仕へん
三年の短き月日費やして萬代不易の神業に進まむ

獨寢の秋の長夜の虫の音は天下唯一の枕の友なり

○作歌夏の部

保津の川流す筏の赤きまで紅葉散りしく晩秋の風
眞帆片帆水に浸して夕映の血沼の浦輪の麗しきかな
稻妻は山のあなたにひらめきて血沼の浦輪の浪靜かなり
打ち上ぐる煙火は水に映え乍ら人波よする嵐山かな
桂川月滿つ夜半に舟うけてうたふも涼し夏の夕ぐれ
涼み舟紅提燈の川風にさゆれにゆれて絃歌たゞよふ

兩岸の保津の景色をほめ乍ら矢の如下る舟の涼しさ
天つ空渡るが如くおもふかな海の底まで月てる夕船
涼み舟岸にとどめて磯馴松の梢にさゆる月をみしかな
夏されば保津の川邊に舟うけて波にくだくる月みる涼しさ
涼風を面にうけて青葉映ゆる木曾の流れを楽しく下る
夏されば橋の眞下に舟よせて嵐山下りの舟よそひせむ
さながらに秋の夕べの心地かな月てる流れに舟をうかべて
青葉しげる溪川下る舟の上のこの涼しさを家土産にせむ
たへがたき暑さは陸にのこるらん沖の方より夜半の風ふく

薄衣の袂に風を孕ませて渡るも涼し保津の川舟
鮎の瀬をのぼる姿をみながらに下る女舟川風涼し
舟にある美人の面のみゆるまで小籠まきあげる宇治の川風
大空の涼しき月に憧憬れておもはぬ方に舟をながしつ
小雲川とま舟うけて松風の香をきゝつゝ下る涼しき
三味の香は波上を走り松の聲月に言とふ涼み舟かな
磯の邊の松吹く風の香きけば炎暑の夏も暫し忘るゝ
綿栞地の浴衣涼しき高台に銀杏の風をうけて佇む
青柳の下に涼みの舟とめて待てどもおそし初夜の月光



出口聖師揮毫の山水

月の夜に舟をうかべて川水に晝の暑さを流しけるかな
水棹に月をくだきて下り行く涼みの舟の足早きかな
水棹に月を破りて行く舟のへさきにきらめく瀬々の白浪
夏木立水にうつらふ深淵の上こぎ渡る舟の涼しさ
遠近の山々ふかく落付きて御空そら静かに秋晴れ渡る
天恩郷濠のおもてに曉天の秋雲映えて静かに過ぎ行く
秋づきて濠のあちこち言問ひし蛙の鳴く音なれ稀になりけり
安生のやかたを底に打ち没し水の面澄める花明山の濠
秋ふかみ神苑の萩のこぼれちる下に悲かなしく鉦かねたゞき啼く

人の影見えぬ野道に薄埃り立つは雀の羽ばたきならんか
三伏の暑さをさけて位久田川下る小舟に川風涼し
清水もて洗ひし如き大空の月照る夕べの風の涼しさ

○作歌 秋の部

別れ行きし後にこほろぎひた啼きて秋の長夜の寝られぬさみしさ
こほろぎのひそくと啼く眞夜中に遠きにいます君おもふかな
小夜ふけて一人さみしく寝ぬる夜の枕はなれぬこほろぎの聲
さりがてに面うつぶせて泣く君の別れ惜しまる秋のまぼろし
ラアレターむなしくなりし秋の夜の聲さりんとす聞くぞかなしき

くれなるのダリヤの花は愛戀のなげきも知らず風にふるへり
秋日さす芝生の上にやすらへば風のそよぎにおつる栗の實
待つ人はつひに来らず月さゆる夕べの丘にまねく穂芒
月さゆる夕べの丘に吾妹子と芒のさやをぬきて遊びし
離り住む夜半の枕にきりぐす聲さびしげに啼きわたるかな
虫の聲きれぐに啼く秋の夜半に君なつかしみ筆を走らす

○作歌 夏の部

山道のカーアを自動車のり行けば少女戀しきねむの花咲く
青柳の糸なつかしき黒髪を君を戀ひつゝ夕べの街行く

池の邊の水にうつりし紫のあやめの中にたちし君はも
麥のびし畠に君としのび行けばあわたしげに雲雀たちたり
若草の妻のおもてに若葉さす朝日匂ひて一入麗し
ふりかへり目を交しつゝ別れたる妹の姿の目にをどるかも
萩の上に朝露しづく山道を通ふもうれし君を慰ひつゝ
桐の葉の音なく落つる夕まぐれさみしまさる君の奥津城
夕づく夜曇れる下に人目さけて君とかたりし昔なつかし
○作歌秋の部
穂芒の左右にまねく野の道を提燈ともして來るは何人

月さゆる秋の夕べに別れすむ君おもふ時カナノの啼く
君は西吾は東に住む神苑をめぐれる山に秋は深めり
道ばたの稻穂をぬきてかみてみぬ待てど來ぬ夜の君をうらみて
紫にうれたる庭の葡萄の實を君に見せんと探らず置きたり
朝庭にたち出で見れば蟬おちぬ久しく逢はぬ君おもふ時
その昔君と遊びし西山はまぼろしの如雨にかすめり
夕陽かげ穂芒に映ゆ野の道に君とかたりし事を忘れず
霜がるゝ晩秋の野の草よりもはかなかりけり君と吾とは
吾軒に吊るせる忍草に風そよぎくるく廻る涼しき夕暮

雨晴れの朝の庭の松ヶ枝に光りかゞやう露の玉かな
 公達の平氏ならねど家鶴の軒立つ羽音怪しみ見しかな
 秋晴れの大空高く並山の尾の上低みて風 牙 渡る
 醫王山煙草吹かしつ大空に薄雲ありて雨もやうなり
 絹を裂く如くに響く製材所の汽笛のいやに頭にこたゆる
 君ひとり戀ひ渡りつゝ秋の日をあたらし淋しく暮しけるかな
 たそがれて谷の細道たどり行けば山の尾の上は尾花にかくれつ
 尾花咲く簀をすかしてたそがれの空を仰げば山の尾低し
 雨晴れの朝庭冷えて苦瓜くわの色づく下に小猫たはむる

桐一葉風なく落つる夕空に迫れる秋のおとづれを聞く
 打ち煽ぐ團扇の風も冷えくと身にしむ秋となりにけるかな
 春風は戀にかをれど秋風のそよげば醒むる幻の夢
 あした咲く朝顔棚の夏と秋またげて匂ふ花の色かな
 四十九里波の彼方の戀人を想ふ夕べに天の川 映ゆ

◆九月十日 中外日報所載記事

山口玉仁三郎氏の製作品展覧會が催されるからとあつて、恒一に誘はれ
 て徳岡の大本教を訪れた▲墨繪の山水から、紅紫に彩られた美人畫、色紙短

冊など打ち混じて数千點▲それから茶器菓子鉢などの陶樂燒、千態萬様の製
 作品▲よくも斯くまでに多量製産されたものと先づその精力に舌を捲く▲特
 に一物一點に悉く王仁氏の人品風格が織込まれて、悠容迫らざる風姿▲之
 が五十年百年の後には大本聖師の御自作として、幾萬圓に價値付けられる時
 が来るのだらう▲當日は王仁氏を初め、宇知磨氏及び御田村氏、特に來合さ
 れた醫學博士大和通伸氏等の優遇を受けた▲青海王が二十九王の代表として
 王仁氏に贈られたといふ大虎の皮を、特に椅子にかけて之に腰かけしめられ
 たのは、聊か尻がこそばゆかつた▲王仁さんは兎に角鱗型の大きな羽目を外
 した人であり、四方をけむけで稚氣満々、罪のない法螺吹きの小供のやうな
 人▲茶室で大身鎗を使ふやうにコセ／＼と狭つ苦ししい小才人ばかりの世に
 ▲王仁さんのやうなボンヤリと大きく浮き出た一人物のあるのも當世の珍だ

▲製作品中から布袋の一軸及び初篋に生れた薄茶々碗を贈られた▲その箱に
 眞如樂燒銘朝線、呈上涙骨氏、王仁と記されてある。

九月十一日 當二百二十日風の日 於 高天閣

百姓の風にわづらふ今日の朝は四方靜けく空晴れ渡れり
 伊都能賣の觀音像の御前に手を拍つ音の冴ゆる朝晴れ

京都市に私用ありて御田村主事朝晴れの空に汽車に搭せり
梅田宣使田中氏二人を伴ひて難波布教の報告爲し行く

○梅田寛一氏に送る歌

教祖神梅で開い田聖道は寛仁一途の律なりけり
大教祖梅で開い田中つ國の大道にさやらん曲神は無し

澤田宣使中村純也氏令妹と華燭の典を目出度くあゆたり
上野公園山田七平兩士今日光照殿に上りしを聞く

鳳聲氏像彫刻の謝禮とし桃二十五個一先づ贈る
東路に明日歸らんと福島氏夕べ高天閣にのほれり
更始會講演の爲明月氏夕べの汽車にて京都にのほる
牡丹餅を大皿に盛り神風氏高天閣におくり來れり
九州島に歸らんとして山口氏たそがる、前挨拶に來る

月宮殿松虫さえて秋深し
一人行く野邊の松虫あらゝぎの中に潜みて啼く音涼しき

秋去れば人をまつてふ虫の音に誘はれ野路を通ひし若き日
淋しきにおぼしまに立つ夕まぐれ人まつ虫の聲頼りなり
その君の來るべき夜と小夜更けてわがまつ虫の音枕に通ふ
神苑の花の小蔭に終夜よもすがら誰れをまつ虫啼く音寂しも
月をまつ虫の數々聲限り啼き立つるかた神苑のあちこち
松虫の聲するかたにおのづから吾が足向きぬ月の照る夜半
小夜更けて聲を惜しまぬ松虫の啼く音清けく窓明けて見し
こゝら啼く人まつ虫の音もさえて月は早くも西にかたむく
終夜よもすがら戀なきつたふまつ虫の聲きく時は昔なつかし

小夜更けて遙けき野邊の松原になく松虫の聲耳に入る
千歳とぞ誓ひし人をまつ虫の夜半に果敢なき戀もするかな
まつ虫の千代をならせる聲聞けば獨り寢る夜の秋ぞ淋しき
萬代の秋を忘れずまつ虫の操は清し望月の夜半
常磐木の名には違ひて松虫のひた啼く夕べ風立ち騒ぐ
苔の生す巖に根ざす松虫の操を變へず此の秋も啼く
千代八千代互にちぎりけん程や君まつ虫の聲も漏れつゝ
常磐木の松の名に負ふ虫なれば操を變へず此の秋も啼け
訪ふ人も無き賤の家の軒近く誰をまつ虫聲限り啼く

秋深み人をまつ虫一つ家の人目絶え行く庭にひた啼く
來んと云ひし程や過ぎぬる秋の夜の人まつ虫の聲も細りつ
穂芒をわけ越しあとに細々とまつ虫の聲風に流れつ
來ぬ人をひたに慕ひて終夜心ながくも松虫の啼く
戀ふる人の心にまかせて松虫の吾身の上に初夜の月照る
夕されば神苑に人をまつ虫の聲も涼しくひた啼きに啼く
秋の日の一夜に末の千夜をこめて君と逢瀬をまつ虫の啼く
草わきて秋の夜一人野路行けば吾れを松虫あらゝぎに啼く
君しのぶ草に伏しつゝ松虫の聲聞く夜半は樂しかりけり

秋の野に人をし戀ひて松虫のひたなく空に新月照る
夜な／＼に誰をまつ虫澄める音は月すむ宿のほこらひなりけり
かりそめの宿りに聞きし松虫の聲身にしみる秋の夕暮
吾れは今一人ある身ぞ草の下に誰れを松虫啼き明かすらむ
松虫の月に唄へる清しさに天恩郷の戀まさりけり
あはれにも誰をまつ虫霜ふかきこの宵々にきれ／＼に啼く
わびしらに夜半々々歌ふ松虫の聲に誘はれ物思ふかな
霜ふみて啼く松虫の聲聞けば晩秋の夜は何か悲しき
りん／＼と鈴虫の聲聞くゆなり千木高知りし産土の庭

草に伏し心ゆくまで聞き惚れぬ鈴虫りん／＼夕暮の聲
故郷に歸りて聞ける鈴虫は昔ながらの聲にぞありける
變り行く世に鈴虫の聲聞けば昔ながらにさやかなりけり
年を経し鈴虫ならんか庭の面に啼けるを聞けば去年の古聲
人戀ひて辻堂近く待つ夜半のふる草に啼くあはれ鈴虫
鈴鹿山ふりはえて啼く鈴虫の聲高らかに月はほれり
ふり立つる鈴の音に似し鈴虫の月の小倉の山になきつる
月になる空待ちわびて鈴虫の神樂ヶ岡に啼く聲清し
鈴虫の聲いや高くなりまさる神樂ヶ岡に月ののぼれば

たまさかに君と會ふ夜のかよしよ襦干に袖ふりはえて鈴虫のなく
鈴鹿山月になりゆく黒鹿毛の尻ふる夕べ鈴虫の啼く
東山月はのぼりて鈴虫の聲いや高くなりまさるなり
別れ住む秋の夕べは鈴虫の聲聞くさへも涙ふりそふ
幾年かあ経りゆくまゝに吾軒の鈴虫聲も細りけるかな
さやかなる仲秋の月眺めんと背戸に出づれば鈴虫の聲
鈴虫の小夜更くる迄神苑になく音ふりゆく月の下かけ
吾家の古きかぢね籠に聲かぎり啼く鈴虫のさやかなるかな
きり／＼す聲なつかしく聞く夜半の窓にかゞやく秋の夜の月

きりり／＼すなく聲絶えず神苑に夕雨あびて物うげに啼く
野路ゆけば聲きりり／＼すあはれげに草むらになく霜の夜半かな
われこそは秋の長夜のきりり／＼す思ひあまりて壁に啼くなり
荒篋の壁にすがりて終夜啼くきりり／＼す吾に似しかな
吾戀は壁の中なるきりり／＼す啼けど歌へど知る人はなし
吾床こゝろの下にも来なくきりり／＼す聞く夜涙に枕ぬらせり
床近く夜な／＼来なくきりり／＼す吾が思ふ人の幻ならんか
吾戀ふる人の靈魂みたまかきりり／＼す夜半の枕の下になくなり
小夜更けてなくきりり／＼す聲細み亂れゆくかな君戀ふ枕に

秋の夜のあくる枕に遠ざかる聲きりり／＼すいづちゆきけん
秋の夜の風冷え／＼ときりり／＼す吾手枕たまくらの下に來て啼く
只さへも眠られ離き秋の夜に老いの寢覺をさそふこほろぎ
寢覺とふ秋の長夜のきりり／＼す月冴ゆる夜は殊更高し
押並べて物のあはれは誰も知れり月に焦るゝこほろぎの聲
夜嵐におのがすみかを荒らされて移り住みしかこほろぎ啼かず
亂れゆく世を悲しむかきりり／＼す夜な／＼草にひそみては啼く
天恩郷夕さり來れば草毎に啼くこほろぎの聲さやかなり
きりり／＼す草の宿りも月冴ゆる夜半には一人聲さやかなり

刈残す草葉の宿に潜みつゝ何を戀ふらんこほろぎの啼く
浅茅原踏み分けに行けば右左聲なつかしくきりりす啼く
晝も夜も浅茅がもとに身をひそめ啼くこほろぎのあはれなるかな
秋萩の色づく頃とはやなりて貴の神苑にすだくこほろぎ
庭草に宿を定めてこほろぎが夜な／＼歌ふ頃とはなりけり
欄干に雪洞ともせばきりりす庭にうつるか聲近みけり
終夜蓬が宿に身をひそめうたふも涼しこほろぎの聲
雨風にあれたる宿の一夜さを如何に過ごすかあはれこほろぎ
汝が爲にあらせる宿にあらざれば今日も来て啼け野邊のこほろぎ

白露の置く庭深くこほろぎの啼く音さえつゝ夜は明けにけり
風ひゆる浅茅ヶ原の夕かげに啼くこほろぎの聲細きかな
秋されば長き夜すがら啼き渡る神苑すがしきこほろぎの聲
秋深み野邊の夜寒に堪へかねて細りゆくかなこほろぎの聲
秋の夜のあはれは野邊のこほろぎの啼く音にまさる物なかりけり
こほろぎの聲細々と啼く聞けばあきはて難き心地するかな
秋ふけぬ尾花の咲きぬ月冴えぬ貴の神苑に啼くやこほろぎ
秋風のやゝふく野邊のきりりす今日を限りとひたなきに啼く
龍田山峯の尾上に野分して啼くこほろぎの聲ぞ淋しき

近江路や小野の篠原しのび香にきりくす暗く夜半の淋しも
たてよこの綾と錦の神苑に機織る虫のなく香清しも
促織はたおりの富士の裾野になく聲の天に届くか月はほゝゑむ
くだをまく聲にも似たるはたおりの虫の香消して荒浪の打つ
草の原右と左に飛交ひて月澄む夜半にはたおりの暗く
草むらに小羽こは打ちはえてはたおりのすだく夕べは風さえ渡る
さゝがにの糸ひきかくる賤ヶ家の軒にも来なく促織虫かな
露のぬき露のたてをば綾どりて機織る虫のなく音さえたり
七草の花の錦をたてぬきに飛び交ひて織るはたおりの虫かな

秋さればはたおりの虫の右左飛交ひつゝも唐錦織る
風寒み野邊の錦に包まれてはたおりの啼く糸萩の上
野邊毎にはたおりの虫の聲さえて秋の山姫錦をかざす
はたおりの聲きれくになりゆきてねやの衾ふすまに夜寒をぞしる
武士の夢路を辿る眞夜中に草分けてなく轉虫くつりかな
馬肥ゆる秋の夕べの草になく轉虫の音さやかなるかな
さやかなる聲はりあげて葦原の草葉に宿かるくつわ虫かな
香背子の打乗る駒の足早み秋立つ旅にくつわ虫啼く
眞夜中に誰が乗る駒かがちや／＼とくつわ虫の音枕に傳ふ

駒並べてゆく人なきに終夜枕に近きくつわ虫の香
馬走せて来る人あらじと思へども秋の夕べにくつわ虫の香
秋深くなりゆく野邊に響虫今日を命とひたなきに啼く
夢さめてくつわ虫の香きく夜半は事のあるかと驚かれぬる
駒うたせ遠方人の來たるにや夕べの門に響虫啼く
風冷えて片山里は蝸ひびらしにふけゆく秋の静かなるかな
蝸の聲きく山に風たちて落ちゆく夕日の静かなるかな
蝸のなく山里に住みてより秋來たりぬとさとりけるかな
蝸のなく夕暮は風死して静かなりけり天恩の郷

蝸の啼く音静かにをさまりてあたり淋しき夕まぐれかな
袖人のかげも木下に消え失せて蝸のなく秋の夕暮
入口さす三室の山の木々の枝に秋來ぬと啼く蝸のこゑ
人慰ひて物思ふ時向つ山に聲をひそめて蝸のなく
秋風に吹かれてなくか産土の杜の老木に宿かる蝸
秋風に草葉そよぎて神苑の櫟林にひぐらしのなく
只一人萩咲く野邊をさすらへば秋悲しげに蝸のなく
山かげの一本杉の梢をば永久の宿りと蝸のなく
朝夕に虫の音をきく天恩郷の秋の神苑は一人樂しき

小夜更けて神苑の虫の音をきけば吾が戀ふ人の佛浮かぶ
 歸りゆく人に名残は惜しめども月日の駒をせくよしもなし
 秋の夜の草葉にすだく虫の音ときゝ流してん浮名立つとも
 秋の空浮名も高く立田山顔に紅葉を散らす床しき
 待ち侘びし人に逢ふ間も短夜の名残惜しくも明け放れけり
 鳥が鳴く東の空に歸りゆく人に名残りを惜しみて見送る
 その君と遠く離れて一人住む秋の夜長にかな／＼の啼く
 神苑の彼方此方に虫の樂奏づる秋の夜は樂しも

◇九月十一日 中外日報所載記事

大本教宣傳の前衛のやうな人類愛善新聞は今、實數十一萬八千部を印刷す
 る▲けだし大本の「力」は大衆本位に基く。インテリゲンチヤを睨つた天理教
 は兩頭蛇化せんとしてゐる▲聖師様と呼ばれる王仁大先生が、盆踊に飛び出
 て自ら音頭取をやるなどは少し困ると大本信者は氣にする▲焉ぞ知らん、そ
 こが大本の大本たる特殊的基調色であらうものに……………

九月十一日 中外日報所載記事

九月十一日 舊八月十日 於 高天閣

高天閣起き出で見れば山の尾は雲晴れてあり風さやかなり
京都市に上らんとして忙がしく沐浴もなさず朝飯を食ふ
自動車を走らせ乍ら九時過ぎの龜岡發にやつこのり込む
東京に歸らむとして福嶋氏二條驛まで同車して行く
鐵外氏夫人も共に同車して二條の驛に訣別かてり
龜岡の驛に見送る 明光社宗匠宣信數多ありけり

大空に雲立ち籠めて今日も亦雨來るらしき氣配するかな
請田口進み來りて溪見れば日々の雨にて水がさ増されり
秋の色保津の溪間に漂ひて松吹く川風音さやかなり
嵯峨の里越えて花園來て見れば白鬘の僧路傍に佇む
福嶋氏二條の驛に訣別し中野夫人と東に向ふ
宣信徒二條の驛にうごなはり吾れを笑顔に出迎へけり
二條驛プラット出づれば森田氏の使と谷氏吾を出迎ふ
自動車を走らせ京都神泉苑町京都分所に入りて休らふ

神樂岡森田氏邸を訪れて二階の一間に快談をなす
一行は明月満月御尤も大和博士を加へて五人
歸るさに東洋花壇にまねかれてちびれ筆もて書畫を認む
京都市を一眸のもこに瞰下する東洋花壇の眺めよきかな
鈴虫に其名を得たる神樂岡いまはカナ／＼さへも啼かなく
あか／＼と日本一の大鳥居平安神宮の表に立つ見ゆ
東山東洋花壇ゆ眺むれば蒲團着て寝た山とは見えす
煙突はあなたこなたに林立し黒煙を吐く京都市の空

煤煙に色のあせたる本願寺南の果てに並び立つ見ゆ
田螺がらぶちあけしごと京都市の家並カラ／＼見え渡るかな
神樂岡四年振りにて來て見ればあたりの景色いたく變れり
勤王の志士此の山に集まりて維新の大業なせしとぞきく
錦葉の袖ふりはえて鈴虫の昔なきたる神樂岡かな
自動車を二臺連ねて丸太町川端新實氏邸に馳せ行く
新實邸門に宣信三四名わが行く遅しと待ち迎へ居り
玉敷の花の都の中央に山紫水明新實邸哉

庭の面に瀧の水音滔々とおつるを見れば都を思へず
東山背景として築きたるこの廣庭の神さびたる哉
邸内も瀬見の小川を悠々真鯉緋鯉の泳ぎ遊べる
千引岩あまたつきへて築きたるこの廣庭の眺め清しも
信徒のあつき心の湯に入ればめづらしきかな半水半湯
風呂蓋で湯をまぜかへし竈の下焚いて貰ひてぬくもりにけり
花菱の袈裟にはあらず七條のしろき條ある浴衣着しかな
唯一人蒲團の上に寝ころべばやぶ蚊しのびて我足をさす



徒信と師聖口出るけ於に邸實新市都京

庭先の瀧の墨繪を我の來し記念の爲めと認めにけり
繪を描き書をしるしつゝ、半切紙七八枚を費しにけり
小夜更けて瀧津瀬の音いや高くかりねの枕離れぬ宵かな
手や足を揉んで貰へき吾妹子にあらねば何か氣のひけるなり

○

襟葉の梢に秋は深みつゝ風冷えわたる花明山神苑
汝が戀は桂の川のあげ煙火あつと云ふ間もあらず消えゆく
氣の利いた着物きてるとよく見れば上から下まで借物なりけり

鴨川の清き流は潤るゝともかわく間もなき我袂かな
獨り住む秋の夕べの淋しさは萩の露こそ力なりけり
風旱の天恩郷と鞍の里二つに通ふ怪し我魂
兩聖地戀しと言舉げする我は戀の秘密を蔽はん爲めのみ
到る所青山青樓ありと云ふ花の都の去り難きかな
大夫はんの事思ひ出し鳥原の柳の影の慕はしくなりぬ
大夫はんが戀しと云ふは御尤も娘が聞いたら水の粟辻
青貝の間にほの暗き蠟燭をおやし立てつゝ赤貝をかふ
三雲さん夫婦と大夫はん買ひにいて粟辻さんが八三雲となる

おせえさんがあんだ御車大夫はんと云へばうちかけ引きする大夫さん
酒のなき杯を手にくね〜と妙な眞似する御車大夫はん

○作歌夏の部

芦の葉にすれ〜押し行くとき舟の小籠^{をす}捲き上げてそよぐ川風
深淵のほとりの樹立高くして夏を忘るゝ船の涼しも
夜の更くるとは白波の上漕ぎて暑さ忘るゝ納涼船かな
とま船に風孕ませて保津の川月照る夕べは夏忘れけり
鴨^{カモ}の海波間に浮かぶ月かげを水棹に砕く涼みの船かな
月さゆる大井の川に船浮けて吹く川風に夜を更かしけり

笛の音は波上を迂り簞の音は風に流れて夜船更け行く
汗にじむ一日楽しく流しけり日本ラインに船を浮かべて
月かげを船に照らして流れ行く水の面涼しく川風の吹く
水に照る月に水棹をかざしつゝ流す小船に川風涼し
河の面にはゆるる月影いや涼しいざや浮かばん夕べの小船に
宇治川の清き水瀬に納涼船浮かべて暑さ忘れけるかな
月すみて流れ清けき小雲川納涼の船に夏忘れけり
足乳根の母の土産にせんよしもながれ涼しき船の川風
夏秋の季節にかまはず敷島の道のためとて歌を詠むなり

秋の夜の多かる虫のその中にすぐれて清し鈴虫の聲
欄干に立ちて月照る神苑になく虫の音もなつかしみきく
神苑の虫の音閉ぢて拍手のすがしく響く高天開かな
虫の樂あまりたのしく清ければ秋の日の旅のばしけるかな
戀の歌吾が詠みゆけば大空に澄む月かげのほゝあめる見ゆ
仲秋の月澄み渡る高殿にうち安けくも虫の音をきく
神苑の鈴虫の音に鼓はんと鶯夫人たそがれ來たれり
えち／＼と神苑を歩む少年の太き姿は小牛に似しかな
あどけなき姿なるかなまゝまるく肥え太りたる神苑の少年

鶯の奏づる春は過ぎ去りて虫きく頃となりけるかな
夕風に吹かれてそよぐ黒髪の涼しげなるかな鶯の君
七草の山野に匂ふ秋の日は生甲斐ある世と思ひけるかな
海へ渡る月の面をさへぎりて鳴き渡るかな雁の一枚
仲秋の空にさやけき月なくば秋の心はおこらざるべし
闇の幕透して響く自動車の音高々と町を走せゆく
高殿に澄む月かげを眺むればわれ地の上にありと思はず
雲に浮く天恩郷の高台は月照る夜半の山低きかな
苦瓜くわの電燈映えて赤く青く下がる姿のしとやかなるかな

明日は又むしり探らんと苦瓜の赤く熟れゆくさまを楽しむ
大空の月は牙ゆれど高殿を一ツ残して闇の幕びく
戸を明けて月を眺めつ寝ぬる夜の枕淋しく虫の音さゆる
いとひろき蚊帳の中に月入れて一人寝る夜の惜しくもあるかな
窓あけて惜しや一人が蚊帳の中只さすものは月かげのみなる
人間味あまりに多き理師よとあきれ顔なる東人あづまかな
手を膝にのせて物書く觀人の眼涼しく何思ふらん
所在なさに羽織の紐をいぢりつゝ伏目ふしめがちなる東人かな
膝の上にきちんと兩手を組み乍ら白齋の美人何かほゝそむ

今宵また一人寝るか
と欄干らんだんに立ち出で月に歎きけるかな
さすものは葢敷ばかりと思ひしに吾が寝る蚊帳に月かげのさす
まんまるき布袋の君は綾の里われ一人して神苑かむろの月見る
澄み渡る月の光をたよりにてひそくと讀むラアレター哉
澄み渡る空の月かげ恨みたることもありたり若き日の吾
水の垂る如き御空の月かげを鏡かがみとなして魂磨かばや
澄み渡る月に奏づる虫の音はくれゆく秋の主人なりけり
雨雲も限なくはれて大空に澄みきる月を高殿に見る
有難し二百二十日の風の日も静かに暮れて月澄み渡る

欄干に月を眺めて思ふかな吾が戀ふ人の面うつらばやと
吾妹も同じ今宵の月かげを綾の高天に清く見るらん
文机に戀の歌のみ誌しゆくオールドミスのははれなるかな
群明の館の主人戀歌に當てられ尻をからげ逃げゆく
月かげのさゆる眺めてつくくと肩で息するオールドミスかな
虫の聲樂しくきくも大空に冴えたる月のあればなりけり
やがてわれ三十路の坂に達すれば月の鏡に世をば照らさん
照る月の露の玉をば宿しつゝ草の根になく戀の松虫
小夜更けてねられざりけり虫の音の神苑かむろにさゆる高殿の内

さやかなる虫の諸聲惜しまるゝ冬去り夏さり秋の來る迄
敷島の煙りに似たる吾戀は登るにつけてうすれゆくなり
吾戀は細谷川の岩清水川とも流れ海となりゆく
汝が君よ案するなかれ吾戀は天地動くも變らざるべし
程々に懸路の隙を月のかげ充ちかけのある浮世なりせば
澄み渡る空の一つの月かけを力となして戀ふる吾かも
瑞々し月の姿を見るにつけその君の上を憶ふ夜半かな
かきつばた匂へる池の八つ橋に佇む男の罪深きかな
風吹かば 沖津白波 立田山 今業平の 一人 越ゆらん

おや〜とあきれて言葉さへ出でぬ文机の上に戀歌誌しつ
せんぐりにお歌が出るので歸る折御座いませぬといふ女かな
唐紙からかみに委かくして ぼ〜と 時鳥ときどりなく 秋の夕暮
目脂めじをば取りて丸めて膝の上に捨て〜ぼ〜と笑ひくづるゝ
へ〜と笑ひ乍らに鼻つまみ指の垢とる女床しき
水虫のかゆきをかける指の根に白金指輪しろがね光りかどやく
吾妹わが妹子をしのぶのあまり戀歌に心奪さらられて蚊に刺されけり
梅干はしを藪蚊に刺され痛がゆくかけども〜治らぬ背かな
白雲の波に浮びて月の舟傾き乍ら西に流るゝ

醫王山裾に縋引く白雲の月の光りに見ゆる夜半かな
高殿の庭木の梢すかしつゝ、稻荷の山に電燈輝く
仰ぎ見る愛宕の山の電燈は月の光りにうすれけるかな
岐美の手になりし書畫をばこゝ三年貫ひませぬといふ人のあり
今しばし待つて給はれ時來ればいやといふ程書いてあげます
ひし／＼とセルの肌はだに秋立ちて田の面の稻は傾き初めたり
天恩郷そろ／＼歸り度くなつたはやく八時が來ればよいのに
天恩郷歸り度いとは面表おもて實は都にいつまでも居たい
つやのよきオールドミスミスの顔ばかり見てゐる間に足を蚊がさす

明月にタナルを一つ借してやれ口の角すくからよだれが流れる
命にもかへて大事の黒髪をいのち任せた妻に斷らせる
明月がをらねば今宵は鳥原の御車大夫はんのもとにとまらん
あすのあさ天恩郷に用なくば人こふ虫の薬屋にねむ
鳥原の薬屋悪くはなけれどもあひたい見度いは龜山薬屋
月がさし蚊が足を刺す高殿の夕べに君が儂のさす

○

新實邸立ち出で四臺の自動車自動車を走せて二條の驛驛に向へり

京都市に上りし壽賀慶尙江子は龜岡さして歸りしと聞けり
 宇知慶は京都分所の月並に七時の汽車にて着きたりと聞く
 大和博士新實大谷中村氏中江氏其他二條に見送る
 月冴ゆる二條の驛を發車して眺め妙なる花園に入る
 ひえくゞ夕の風の窓吹きて月下を走る汽車の速さよ
 花紅葉虫に名高き嵯峨驛に來れば月光いよくさやけし
 嵐峽館温泉の灯は川水に清く映えつゝ十日の月照る
 知らぬ間に入つゝのトンネルぬけ出で、山本口に走せ出でにけり

龜山の高臺電燈輝きて闇の廣野に夜の花咲く
 龜岡の驛にし着けば宣信徒明光社員等ブラットに向ふ
 明月や満月田中氏夫妻をば加へて五人自動車を馳す
 安生館窓のあかりの池水に映えて清しく月照り虫啼く
 神苑の彼方此方に宣信徒數多立ち出で吾を相迎ふ
 西山に月の入るまで歌詠みてうぐん食ひつゝ寝に入りたり

○夏 秋 の 部

ふりはへて啼く鈴虫の音も清く神樂ヶ岡に秋更け渡る

まだ残る暑さに小舟浮べつゝ土堤の虫きく夕べ涼しき
夏なしと思ひけるかな瀬々の波月を浮かべて遊ぶ小舟は
大井川瀬々の白波立つ夕べそよ風立ちて舟の涼しき
ゆく水に舟をまかせて下る瀬に月を碎きて涼風の吹く
眞晝間にあつさ忘れて多摩川の涼みの舟に月照り風吹く
思ふどち涼みの舟に川風をうけて眞晝のあつさ流せり
鳩トビの湖うみ夕暮近く舟浮けて月をし見れば涼風の吹く
さゞ波の滋賀の大和田舟浮けて月下の波に立つ風涼しも
舟端に鼓打たせて涼む舟の上下に照る夏の夜の月

小夜更くる迄舟の上に涼みして忘れけるかな夏のあつさを
難波江の芦間を漕ぎてゆく舟の空にも月の舟ゆく涼しき
うたの聲涼しく波に響くなりいかなる人の涼み舟にや
初夜の月波を照らしてのぼりけりいざや涼みの舟に乗らなん
思ふどち舟を浮かべてのりゆけば月も隅田の川風の吹く
須磨の浦月に涼みの舟漕げばわが世のなやみ暫し忘るゝ
波の上吹く夕風の涼しさに夜の更くるをも覚えざりけり
信徒と小雲の川に舟うけて松ヶ枝にさす月に涼みし
夜よるされど陸の暑さの堪へ難く涼みの舟に汗を流せり

水の面に冴ゆる月かげうがちつゝ水棹涼しき涼み舟かな
その君と涼みの小舟漕ぎゆけば芦間にうかぶ月はほゝゑむ
糸竹の音色すゞしく聞えつゝ涼みの舟に情緒流るゝ
都路のあつさ残して桂川涼みする間は夏なかりけり
川風に涼みの舟のみなれ棹さす月の面冴ゆる宵かな
涼しきや月の光に川風を小舟にうけて遊ぶ夏の夜
冴え渡る月下にすだく虫の音も秋の音信しるき宵かな
穂芒はさやを拂ひてさら／＼と風にゆれつゝ秋深むなり
初秋の夕べの風のひやゝかにちぎれ／＼に松虫の啼く

三日の月さし入る窓に立ち寄れば梧桐の枝にそよぐ涼風
月冴ゆる夕べ芒におく露の玉を散らして秋風の吹く
どことなく秋の夕べの淋しさを奏づる虫の聲ぞ悲しき
秋來ぬと夕顔棚におく露の雫おとして風ひえ渡る
月冴ゆる夕べに人を松虫の秋の神苑をさまよひて見し
燈火に親しむ秋のおとづれて薄衣の袖朝はうとまる
苦瓜の一度に熟れて赤々と暮れゆく秋の惜まるゝかな

◆九月十二日 中外日報所載記事

百 面 相

王 仁、 旬 佛

どちらも意味は異なるが問題？の人、それが昨年北海道で根室から帯廣に行
く列車を共にした。途中驛々で兩方の出迎へ信者が南無阿彌陀、高天原々々
々ボンボン（このボン／＼は煙火の音）おもしろかつたヨーとは王仁さんの逸懷

◆九月十二日 中外日報所載記事

俠 豪 と 敬 主

今 北 氏 と 出 口 氏

大阪に於ける仁俠の人として有名な今北治作氏が出口王仁三郎氏を後授し
て奈良縣下に大本別院を建設するといふ事である。之に就いて今北氏の意
見を求めたが、氏は言下に否定してそんなことは知らないと言つてゐる。

◆………出口君が何をしてゐるのかその事業に就ては一切知らない。自分と
出口君との關係は人間と人間との關係だけであつて大本がどうの人類愛善會
がどうのといふやうなことには少しも關りが無い。たゞ大阪で人類愛善會の
顧問をして呉れと言はれるので、それをやつてゐるが、その内容に就いても
少しも關知してゐない。

◆………出口君も日本では有名な人である。自分も少しは名を知られてゐる
君が出口君か僕は今北だと名乗り合つて交際をしてゐる丈であるが、大阪へ
出口君が来れば必ず訪ねて呉れることになつてゐる。

◇……自分は宗教がどうしたとか信じなければならぬとか研究を仕様と
 かさう云ふ考へは少しも持つてゐない。生活そのものが宗教だと心得てゐる
 から政治となり経済となり宗教となつて一切の現象が個々のやうに思ふのは
 間違なんだらう。總ては一つのものなんだと思つてゐる。だから既成新成總
 ての宗教には一切關係なし、出口君との關係にしても人間が面白いから交際
 してゐるので大本の教義がどうだあゝだとは自分は少しも知らないのである
 中外日報ですか、これは好い新聞だ。近頃くだらない新聞が多くて嫌になつ
 てゐる。これからゆつくり讀まして貰ふか、いづれ日をかへてゆつくり遊び
 に来なさいよ。また大に語らうぢやないか。

九月十三日

於 高 天 閣

南桑の野は一面に霧こめて朝風冷ゆる 龜山高臺
 朝まだき風はひゆれき神苑の虫の啼く音はさやけかりけり
 神苑の萩の梢にあちこちと花咲きそめて秋はふけゆく
 月の宮鳥居のあたり一入にこゑふりはえて鈴虫のなく
 寄宿舎の建築用地定めんと櫟林をわけ入りにけり
 安生の館の病人訪ぬれば總理大人元氣よき哉

久々に時習部とひて安達氏の病床に入り鎮魂を爲す
今日も亦月光寮に入りびたり黄昏る、まで漫畫記せり
今日も亦十一枚の簡単な漫畫をかけたそがれにけり

○漫畫自讃歌十二首

一瞥に城かたむくる魔性委誰に秋波を送るか此女郎
肉体美眼線脚線黒髮美七つ道具で悩ます山猫
櫻井の驛の別れは辛けれど菊水の香は千代に流るゝ
面白き話のはしに釣り込まれ渡らぬ橋を渡りて三笑

大空に鷹を放てば雲に入り知行高までかへらずなり行く
盪染の衣に垢を包みつゝ鬼の念佛鉦たゝきとる
世を茶にし酒にしてゐるズルイ奴飄箆鈿のつかまへ處なし
町のやのねごろ月影さゆる夜の岩を力に研ぎすます武者
一錢のかねを落して滑川せに龜までもつかむ藤網
口斗り大きな奴は大神樂太鼓たゝいて廻る村々
闘ちやんがポー〜湯氣の立つ如うな餅こねながら地蔵顔する
ふり立つた時には鬼も汗搾り鐵棒が曲る床間で精出す

○

京都より男女角力の表装を終りて一組送り來れり
 光照殿漫畫残らすりのぞき新に角力の書をばかけたり
 四十枚新に表具爲さんごて鐵外氏もて京都に送る
 天恩郷西入口の事につき龜岡有志者三名訪ひ來ぬ
 大阪の石原氏より象番立派な木刻贈りくれたり

九月十四日

於高天閣

夕されば秋風たてど人ごみの中をし行けば汗のにじむも
 道の邊に土埃受けて桑の葉の白々いたむまひる頃哉
 八千尋の谷間に架せるつり橋の上に水音目をつぶり聞く
 眞晝まで深霧こむる丹波路は咲く朝顔の盛ながきも
 夕月に冴えたる空に龜岡の青調ラツパ高くひゞけり
 月さゆる漆の面に白々と浮ける鷺鳥の麗しき哉
 聞きなれぬ人の足音ひゞかひて漆の鷺鳥は闇にはゞたく

関の聲風のまに／＼聞えけり巨石を運ぶ人々のこゑ
 小夜ふけて友のあくびの移りしか何とはなしにねむたくなりけり
 先だてる友の小便野にひれば吾も裾をばまくりたくなる
 すなごりにぬれし袂をしぼりつゝひそ／＼かへる夕の空かな
 請田口汽車乗りゆけば谷川の巖かむ水の高くひゞけり
 とほりこし暑さにしばし町はづれ並木の蔭に風浴びてたつ
 連日の雨はくまなく霽れゆきて庭心地よき朝ばれの空
 たわ／＼と伏猪の床に風たちて花の神苑に眞晝日にほふ
 萩の葉の露に月光照りはえてそぞや秋風渡る夕暮

朝晴れの庭に苦瓜色附きて秋深みつ、虫の音清し
 四國路の旅に立たん三壽賀鷹は芳月伴ひ神苑を去る
 久し振り中野武郷氏上り来て大祥殿の講演を聴く
 社用にて大正日々新聞社小山田總務神苑に上る
 智照館石瓦葺九分通りふき上りたり遅蒔き乍らに

萩の家の庭の秋萩明月のかゞやく夕べも花の影なし

明月の秋の夕べに一輪の萩ほころばぬ萩の家淋しも
 夕陽影ささぬ神苑みさのの萩の家は萩の咲くさへ遅れ勝ちなる
 風そよぐ神苑の夕べ萩むらにこぼるゝ花のしをらしさかな
 アカシヤの梢に秋は更け行きて神苑の萩むら匂ひ初めたり
 秋深み 風もさやけき神苑に 町人の足繁くなりけり
 バラソルの松の下蔭四つ五つ静行く見れば明光宗匠
 バラソルの周園まはりを紅く彩れるさして神苑を女天をてんの行く
 びかくと秋陽に光る禿はげ天窓あたま一つ中空に流れ行く見ゆ
 神苑の松葉牡丹や葉かまつ頭かを残して黒い女の草取る

萩の家の萩咲かねども下蔭に松葉牡丹の優しく匂へり
 櫟生の梢もいやに落付きて風さえわたる秋の花明山
 萩匂ひコスモス笑ひ月冴えて虫啼く苑の夜ぞ惜まる
 咲き敢へぬ萩の垂枝に豆蝶の花を求むる風情寂しも
 髓の音冴ゆる神苑の夕暮は秋の淋しさも忘れけるかな
 ○
 萩の折戸を夕暮訪へば にくく窓から月がさす
 主は花明山わたしは綾部 山の隔てが無けりや良い
 ゴムの鉢巻しつかり締めて 風に浮氣をさせぬ髪

獨り住む身も秋さりくれば 月と虫とが慰める
 わたしや秋野の人松虫か 月のかげ見て泣き明す
 萩の下露こぼるゝ夕べ 主の浮氣が氣にかゝる
 花に飛ぶ蝶アレ見やしゃんせ わしの浮氣も無理はない
 主は千里の波濤を渡り 増花見ると氣がもめる
 わしの住居は鳥原近く 主の朝夕氣に懸かる
 髪のはつれを掻き上げ乍ら 風のたよりに氣がいらつ
 萩も匂へよコスモス吹けよ 月の満つ夜に君が来る

○

白萩の花は散れども神苑に まだ咲きほこる紫の萩

○作歌萩の部

武藏野の萩の宿りを立出でゝ風そよぐらん 隅田の川岸
 水鳥の羽音けはしくたつ跡に川風そよぐ萩の一むら
 夕月夜漁火見んと磯行けば 風にそよげる濱萩の聲
 難波江の萩の初穂に風たちて夕べの空に五位覺渡る
 夕陽光舟を濱邊に漕ぎゆけば 風に聲あり萩のともすり
 萩の葉は夕べの風にそよぎつゝ 雁なき渡る武藏野ヶ原

難波江の萩の葉わけて吹く風の音さや／＼に秋は更け行く
岸の邊に萩の葉むけて吹く風に漁る舟の沖の聲聞く
夕まぐれ萩の上葉を右左なでゝ行きかふ水鳥のかげ
秋深み萩の下葉はあか／＼と色づき初めてしぎ鳴き渡る
さすがにも秋のあはれは知られけり難波の浦の萩の枯葉に
朝晴れに沖を眺めてたゞずめば萩の葉風に匂ふ潮の香
秋日和武蔵野行けば冷々と肌心地よき萩の上風
川の邊の萩吹く風を浴び乍ら清しくきゝぬ雁渡る聲
眺めよき岸にたてたる一つ家の庭の萩風秋陽ににほふ

山々は秋の夕陽におちつきて風さやかなり伊勢の濱萩
賤の男の持てる利鎌やからをぎの露しと／＼と濡るゝ袖哉
さゝら萩靡くが上に日のはえてかをれる秋の委涼しき
何人かかき穂の萩のむら／＼とこけつまろびつ秋風亂る
垣めぐる外面の萩に風たちて陽は海低う沈みける哉
おもふごち岸邊を行けば静かなるあしべの萩に水鳥のたつ
池に浮く眞鯉のかげも深くなりて軒端の萩にたつ風寒し
吾庵の軒の下萩風なぎて青くとまれるかまきりのかげ
雨霽の露の下萩靡きつゝ瑠璃の如くに光る月かげ

千歳經し苦むす松の下萩の露さやかなり望月の夜半
月見んとたなゝし舟にまごろめば枕の下萩ゆるる風の音
一人ゆく山下萩に露ふかみかたむく上に朝風のたつ
月光に萩の末葉の露てりてますく訝ゆる虫の聲々
川の面に波たちそめて夕近く萩の一むら風さやぐなり
夕風の強きがまゝに萩の簾川岸の邊に片よりにけり
秋の末早せまり来て風さむみあし邊の萩は赤らみにけり
風そよぐ岸の濱萩たわくと前後左右に首ふる夕暮
人通りなき夕暮の岸の邊に萩うちそよぐ風の寒しも

夕風にそよぐも寒し濱萩の岸邊にたちて人待ち居れば
吹く風にいつも靡けぞ濱萩の吾戀ふ心白波の君
待ち戀ひて川邊にたてば萩の風音こそさやげ君は來まさず
秋風の音づれ初むる夕まぐれ萩照る月の光の涼しも
待てど來ぬ君を根みて戸をさせば萩吹く風の音ぞ残れる
待ちわびし人の來ぬ夜は萩風の音せぬよりも淋しかりけり
小夜更けて嵐にもまるゝ濱萩の倒れ亂るゝ音の憐れさ
小夜嵐岸邊の萩に吹きつけて亂るゝ夜半の音ぞ悲しき
朝川の風に起き伏す萩の葉の露の命を君に捧げむ

濱萩に風うちそよぐ夕まぐれ岸邊にたてば人來鳥なく
夕まぐれ風の吹きよる岸の邊に亂るゝ萩の露ぞかなしき
朝夕の風の妻なる濱萩は何をまねくかやはら穂の手に
朝夕の風の宿りか白波のたつよと見れば萩の亂るゝ
たそがれて風こそ渡れ萩の葉の露にも似たる戀もする哉
人戀ひて夜な／＼通ふ岸の邊に萩の葉末の風渡るなり
吹く風になみよる品のすなほきは君にまかせし吾心哉
萩の葉の末こそ風の吹く夕べ虫の聲さへかなしかりけり
そよ／＼と萩の葉むけの風の音は天津乙女のさゝやきに似し

濱萩の葉末靡かす風きけば月下に妹とさゝやくに似し
何時も聞く風にはあれど萩の露散らすと思へばにくらしきかな
なよ／＼と人だのめなる姿かな風にうち伏す岸邊の濱萩
水の面にうち伏す萩に照る月のかげをし見れば秋風寒し
秋風の聲を聞く哉露おきし萩の一むらさゆれにゆれつゝ
吾戀は萩の葉末の露散らす夜半の嵐に心いたむる
萩の葉の露吹きみだす川風に驚きてたつ水鳥の群
萩の葉の露の白玉月冴えて見るもさやけし秋の夕暮
萩むらの雨にしをるゝやさ姿眺むる夕べ君戀ひ渡る

風たちて萩の一むら雨の音に通ふ夕べの一人寝淋し
一人居て窓の月光眺むれば萩吹く風の音頼りなりけり
瀟萩の露ふき散らす夜風を寝ざめに聞きぬ一人居の窓
吾一人ねる夜の窓に月はえて萩のさゆれを居乍らに見る
君と逢ひし夢も見はてぬ手枕に萩吹く夜風窓たゞきゆく
宵々の枕になるゝ秋風の萩ふく聲をしたしむ一人居
一人寝の枕にそよぐ瀟萩の風の音淋し夜は更け渡る
月の澄む夕べをわきて吹く風のなみ高々と萩の葉に吹く
瀟萩の下葉の色も赤らみて風そよがねど秋をしらす

月の秋風さやかなる川の邊に露の玉をばかざす瀟萩
長き夜の物思ふ宿の一人寝の枕に通ふ瀟萩の風
秋たちてやゝ肌寒くなりし夕月の露照る武藏野の萩
物思ふ事ぞともなく月の光仰ぐ岸邊に萩吹くそよ風
淋しさを吾身にshめて秋の夜の岸邊にたてば萩に聲あり
川風のまにゝ離く萩むらは汝なれにこたふる吾心かも
萩の間の鳥の羽音のはげしさに驚かれつゝしばしたゞずむ
夜なゝに萩の葉露をなむるこそは世に知らぬ風にぞありける
君ありて憂きもなやみも瀟萩の露の朝陽に消ゆる心地す

萩植ゑてくやしさいとゞまさりける人待つ虫の聲のとぎれて
 黄昏れて萩の一むら音もなくしをるゝ見れば涙もよほす
 はかなくも風にちりゆく秋萩の露をし見れば涙おちけり
 夜な〜になれても悲し萩を吹く風身にしみる一人寝の窓
 虫の音は秋の夕べのあはれそふ萩の露吹く風もなければ
 秋の夜のあはれ身にしむ川の邊に風寒みつゝ萩の萎るゝ

○

英雄も涙を揮つて馬稜斬る辛き立場に在る身苦しき

月清み夜風の冷ゆる形原の宮に踊れる人の聲すも
 明光社宗匠連も何故か好きな踊りの場にも行かなく
 江月氏夫君を追うて金澤に今宵龜岡立ちて出で行く
 數百千の虫の啼く聲神苑に流れて寒し月冴え渡る
 高天閣立ち出て石段刻みつゝ歌の明光殿に出で行く
 常識を保たぬ神秘の宣傳使吾誤りを悟らず高ぶる
 大工なら大工をすれば良きものをお蔭取次ぎ御教を亂す
 二度迄は良けれ最早速度目は人に飽かるゝ曲の取次ぎ

今更に宣傳使なき命じたる吾不明をば悔ゆる秋かな
一週間大神殿にて修業するもこころし無くば改る術なし
火の種の無ければ煙立たぬなり百の辯護も水泡と知れ
○
半圓の月は昇りて高殿の近侍の丸き面を照らせり
中秋の月の姿はまるけれど夜なかくかくる様の淋しも
夜もすがら月宮殿の高台に聞くも涼しき鈴虫の聲
吾を待つ人と木蔭によりそへば遊掛した冷たい奴なり

吾戀ふる人の待つよと月光によくくすかせば燈籠のかけ
もしくと美人の聲にふりむけば吾にはあらず八百屋呼ぶ聲
二階から美人招くとよく見れば軒につるした髪結看板
駄鐵をくはされ乍ら本心は惚れて居るよと宣り直し見し
自惚の鏡の前に顔を出しなでつ延ばしつ繕ひ見し哉
年は未だ三十二才と云ふばの顔のあちこち四八たむむなり
白粉で顔の皺をば塗りかくしだます女の狐に似しかな
情ないあゝ情ない年とれば顔黒くなる髪白くなる
白髪染塗りて眞夏の街ゆけば顔黒々とすだれのかゝる

吾とても若い時には白かつた等とたごんが熱を吹くなり
商賈はたごん屋さんかと噂ねられ赤い顔する白髪の蒼かな

○作歌萩の部

萩の花未だ咲きかぬる神苑に何を見んとや町人の来る
秋萩の梢の露に月照りて見るも清しき神苑の夜
糸萩の庭石の上にしだれつゝ露の眞玉をかざす月の夜
眞萩原友としゆけば眞晝陽の萩の梢に秋は長たけたり
萩見れば吾故郷の偲ばれて心は遠く宮城野に飛ぶ

萩咲きて訪ふ人もなき山の家の軒に夜晝鈴虫の啼く
紅にみ空染めつゝ山に入る夕陽ひのかけにはゆる糸萩
紫に咲き揃ひたる萩の苑に立ちてうつらふ衣は誰人
ひもどきて神書讀みゆく窓の邊に萩の香そへて風かをるなり
天恩郷神苑みそのの白萩咲きにけりやがて遠妻来るなるらん
白露の玉をかざして月の夜にかをるも床し神苑そのの萩原
萩咲くや秋の夕べに露見えて月は曇れり雨は煙れり
宮城野の萩の上葉におく露に月冴ゆる夜は君のしのばゆ
今朝の雨にしだれたらん庭の面に所せきまで萩の散り居り

雨過ぎて夕べの空に月照れば萩の梢に露の玉置く
龜山の神苑の萩原わけ行けば吾白露の袖をぬらせり
秋の野に月に匂へる糸萩の葉末の露は五色にはえたり
庭もせに咲き亂れたる秋萩の露の宿りに鈴虫のなく
山里は静かにくれて萩の香のかをるがまゝに秋更け渡る
住みすてし月もる小屋の古庭に主なけれど萩はにほへり
誰が植ゑて置きにけんかも丸山の神苑に匂ふ白萩の花
白萩の枝を手折りて露乍ら床にいけたり雨降る夕べに
宮城野の萩咲く野邊に七ころび鈴虫なきて月冴え渡る



水山の亮揮師聖口出

下をれの白萩の花よごれつゝ、雨の夕べに松虫のなく
牡鹿伏す深山の奥の萩の床おとなふものは月ばかりなり
雁の來るみ空は高く澄みきりて神苑の萩は今盛りなり
秋日和かわける庭のかたすみ^の萩咲く蔭の朝じめり哉
朝戸出に庭の面見れば白々とよべに咲きしか萩のかをれる
朝霧にしかと見えねど向つ山の萩咲くらしも風の匂へる
朝月夜ほのかに見ゆる白萩の葉末に露の玉を見し哉
萩^のの香を神苑^のに残して山の端に静かにねむる夕づく陽かな
入日さす月照山の頂きに露をあびつゝ、白萩の咲く

水の面にしだれて咲ける白萩の露にも似たる慰もするかな
いさゝ川水の面を染め乍ら白萩にほふ夕月夜かな
萩にほふ庭の小池の橋渡る君と吾とは露にぬれけり
吾庭の池の面にかげ見えて白萩かをる月の夜半哉
明日も來ん秋にはあれど今日の日の花惜まるゝ白萩の苑
庭の面の白萩の花の盛りにも待てど來まさぬ君の恨めし
白萩の花の上枝を折りて見し都の君に送らんとして
惜げなく萩の梢を折りしきて君待つ山路に松虫のなく
花になる萩の梢と思へども咲く間も待たで君に送らん

いろ／＼ににほへる花の恨めしき君が心のうつると思へば
月の色にそめられたるか庭萩の露をかざして白々と咲く
本^{ちか}荒^あの^の 幽^{ちゆう}奥^{おく}に咲く萩むらの露に宿かる秋の月光^{かづらひ}
宇陀の野の篠の萩原わけゆけば袖の露にも宿る月光
宮城野の萩はいつしか名ばかりとなりて月のみ空さえ渡る
露寒き宇陀野を行けば咲く萩のかげにひそみてこほろぎのなく
萩の枝早や色づきて紫のつばみあちこちのぞきそめたり
風渡る小野の萩原月さえて秋深みつゝ虫の音清し
風のいろも變ると見ゆる根室路の萩山十里秋陽かをれり

あまりにも萩に名残の借ければ二株三株刈り残すなり
吾袖にふれて白萩こぼれけり心し行かん花咲ける間は
夕風に神苑そのの萩は散りにけり又來る秋を幹に残して
嵯峨の野は萩の梢に月さえて昔乍らに松虫のなぐ
嵯峨の野に紅葉照る間のしをりとて萩にほふなり虫うたふなり
雨にぬれ風にしだれて神苑に匂ふも床し秋萩の花
霧こむる苑にしだれて朝夕の露ににほへる糸萩の花
月のなき夜目にもしるく見えにけり香りも高き白萩の花
本荒の小萩ヶ岡に月待てば袖の露さへ風にかをれり

秋さりて月の龜山上り行けば道もせきまで小萩花咲く
月清き夕べの庭をさすらへば吾袖ぬらす露の玉萩
夕風のそよぎに梢しだれつゝ月ににほへる庭の糸萩
月には元日ににほへども訪ふ人のなくて淋しき野邊の秋萩
吾戀ふる人をまつ虫音もさえて月かをるなり野路の萩原
山ひめは萩の錦を織り出して月をまつ虫夜なぐに啼く
吾妹子のうちきにせんか眞白にも小紫にも匂ふ秋萩
紅べにふかく花の唇そめなして鈴虫啼かす庭の秋萩
奥山のおどろが宿を立出でまよひ來たるか萩の花妻

萩の遊せんよしもなし惟神神の大道にひまなき吾には
吾庭の白萩の花咲きにけりいざ送らばや花の便りを
秋の夜の月光匂ふ萩原に君と遊びし夜を思ふ哉
コスモスの花の蕾は見えねども神苑みづのの萩は今盛りなり
夜嵐のありし朝あしたの萩の枝に薄まじりに咲く紫の花
吾宿の垣根の眞萩咲き初めて訪ふ人の足しげくなりけり
その昔萩咲く宿の夕暮に命までもとちかひし君はも
來るべき人まつ虫の聲かれて神苑の萩は散りすぎにけり
秋深み月の神苑みづのの糸萩は君を待つ間にうつろひにけり

何時の日か野となる庭に咲きほごる萩の心の憐れなるかな
糸萩のいさゝ小川にかげ落す秋の日淋しく君待ちわぶる
秋雨にぬれて匂へる庭の面の萩をし見れば何か戀しき
秋萩のにはへる野邊の中ゆけば人まつ虫の聲あえ渡る
庭の面ににほひて咲ける白萩の清き心を君に見せ度し
咲き初めてまだ間のあらぬ糸萩の乙女の袖にふれては散るなり
白萩の枝もたわゝに咲きみちて露の眞玉に月を宿せり
咲きにほふ白萩梢たわむまで露の眞玉を宿す朝雨
丹波路たはらの霧のまがきにしばられて月にかゞやふ白萩の花

日はおちて夕霧まよふ岡の上にはほふも床し秋萩の花
 萩にほふ天恩郷の花園は虫の音乍ら明けはなれけり
 雨露の萩の梢におく露は秋の光か雁の涙か
 萩の花ほころび初むる夕まぐれ人をまつ虫なき渡る也
 夕月のかげを宿して萩におく露も色ある浮世なりけり
 渡りゆくみ空の月を宿すかな神苑にしげる萩の上露
 吾苑の萩の梢に時雨して色なる涙にくるゝ秋哉
 三年前眺めし萩は咲きてあり吾ふるさとの庭の面に
 月冴えて風かをりつゝ秋萩の亂れて咲ける山里の庭

吾庭のまがきに匂ふ白萩の花を見せ度き人は來まさず
 戀人はいねたるらしも戸を打てごいらへ無ければ萩見てかへる
 君と吾と伏猪の床のかるくともちぎる心の花はかはらじ
 秋深み 神苑の萩の夕風に 雨そゝぎつゝ下葉色づく
 紅葉は色淺けれど山萩の花の錦に小鹿なくらん

○

光月氏さるふんの歌詠みし後夕飯くらへば味のなきかな
 十二夜の月光清くさえ乍ら虫の音高し花明山高殿

製材所煙突の煙絶え果て、花明山高台夕嵐吹けり
 君待ちて夜は更くれども音もなく秋の長夜を獨り寝しかな
 大空の月の鏡に誓ひてし清き心は永久に曇らじ
 夕嵐まだ吹き止まず獨居の夜は更け行きて虫の音淋し
 簾雨のそぼ降る夕べ 疣蛙いぼか柘榴ざくろの花びら瓣背びらにのせて飛ぶ
 鉢植のさつきの花に虹立ちぬ日向ひなたに立ちて霧水吹けば
 このあしたそいろ心の淋しかり君との逢瀬夢にてありせば
 竹筒に百合の白きを挿して見ぬ君来る日なりとあしたの床に
 青空の夏日の下にパラソルの舞ふが如くに木蔭に隠れぬ

雨霽の庭にそよげる檜の風の音さや／＼に心地よき秋
 柿をむくナイフにきらめく秋の陽の光まばゆく眼にしみ渡る
 洋装の似合へる君の脚線美高き乳房を見る眼なやまし

◇九月十四日 中外日報所載記事

大本が今、明年にかけて

海外宣傳に専注

大本教では本年より來年にかけて局面一轉の方策として海外宣傳に力めることになつた。具體的などころではパリに本部を置く西村光月氏は大本の前衛戦線たる人類愛善會の歐洲本部の愛善堂を作ることになり、すでに發表

すると共に相當寄附金などの申込みを受くる状況であると。なほ大本本部の號令のもとに第一支那方面にその運動を開始することとなつて過般來大本の女將軍たる加藤明子氏や北村隆光氏が支那の一種の新興宗教的運動で且つ赤十字的社會運動をして非常な勢力を占めて居る所謂紅卍字宗教即ち道院の運動と提盟するなどあり、兩々相ひまちて新運動を起すことになつたと。

○九月十四日 鹿兒嶋朝日新聞所載記事

大本教主王仁三郎氏

藝術品展覽會

あすまで本社樓上で

大本教の教主出口王仁三郎氏の藝術品展覽會が昨日から本社の上で蓋を

明けた。王仁三郎氏が多忙な布教の務——寧ろ餘技になつたものであるが、幅書など流石に氣魄に富み雄渾な筆致はその道の人としか思はれない。山水花鳥、人物などゆくとして可ならざるなく、畫面に独自の境地を開拓してゐる。その他短冊色紙など頗る觀賞に値し、普通の書展や書展と趣を異にしたところに大本教の篤依者は隨喜し普通一般の間でも頗る推稱してゐる。昨日は觀覽者が頗る多く雜沓を極めたが、明日まで開催し入場を歓迎してゐる。

○九月十四日 山梨毎日新聞所載記事

甲商教員に大本教信者

奇怪な事實と蓋谷議員が當局に質問

十二日の市會で別項の補助金問題が委員附托となつて一段落となるや蓋谷

議員は起つて

『甲府商業學校教員で名前は判らぬが大本教の信者があり、日頃生徒に宣傳してゐると云ふ事であるが、大本教は人の知る如く既に解散を命ぜられ五仁三郎は不敬罪として官憲の取調を受けしほどの謂はゞ邪教である。斯る邪教を生徒に宣傳するが如き若し事實とすれば由々敷問題だと思ふが當局は其事實を知れりや』

との質問に對し日向視學は

『大本教か何教か知らぬが信者のある事は知つてゐるが、マサカ教壇で宣傳するやうなことはないと思ふ。而し尙慎重に真相を調査しよう』
と答へてケリがついたが如何に宗教は自由だとは云へ、大本教の如き世間を騒がせた問題の邪教を實際生徒に宣傳した事實があつたとすれば、教育上忌

まはしい事件で、市當局が監督怠慢の謗も免れぬ譯である。

甲商の教師に信者あつたとて何が悪いか調べてもの言へ
澁谷五分の淺智慧もつて大本を裁かんとする非常識かな
澁谷の山家を早く立出で、文化の空氣をチトは吸うて見よ
尻理窟を言つた後から尻すぼめ

九月十五日

於高天閣

朝晴れの明光殿を起き出で、神苑縫ひつゝ、浴槽に浸る
 月宮殿秋陽に映えてびか／＼とまばゆき迄にかゞやく今日かな
 柴田國手朝訪ひ來り佐藤子の病症經過具さに報ぜり
 穴太より生母來りて苦瓜の實のれる狀を眺め歡こぶ
 勝本氏佐藤青年兩人に宇知慶通して見舞を送る
 穴太より上田和一氏訪ひ來り田かへ／＼と言問ひて行く

夕陽落ちて神苑を巡り安生のやかたに入りて鎮魂をなす
 櫟生の林に風の音絶えて濼の鶯鳥はひた鳴きに鳴く
 千秋苑花壇の手入れ届かすて葉鶏頭ばかり三つ四つ美はし
 徒に人足斗り多くして日々に花壇はさびれ行くなり
 誠なき人の所業は秋の日の花壇の面にうつろひにけり
 是しきの温室花壇は一人にて充分世話の出来るものなり
 誠さへあらば如何なる難業も神の守りに安く成るべし
 北夕紙見ればムラ／＼腹立ちて一瞥もせず裂き捨てにけり

信仰を渡世の飾りとする人の心はまさかの時にあらはる
黄昏れて神明館を訪問し腹立つまゝに歌筆を持つ
いやが上に山落ちつきて秋深し

○

昔から書物ばかりを読み耽り中毒のまゝ死ぬ人多し
世を亂し家を潰すも若死も残らず讀書の中毒なりけり
愛善のまことの書物にあらざれば残らず身魂の毒となるべし
大學の門を出でたる青年の色あをくくと若死の相

赤門を出で、間もなく肺病の悪魔に襲はる今の青年
充棟の古今の書籍おしなべて身魂をよわむるものばかりなる
安らげく國ををさむる要訣は神のものせし愛善の書物
身体の發達すべき年頃を學にふけりて纖弱となる
學問に迷信すれば何もかも物事見る目開となりゆく
世の中に立ちて失敗するものは赤門を出た青年のみなる
若きより身を苦しめて働きし人ぞ社會の木鐸となる
淺薄な外來の學究むより小學を出て終日働け
小學を出でたる人より世の中の事にくらきは赤門出身

蓄音器毎年はき出す赤門の學生達に赤くなりゆく
學問に中毒すれば世の中にたちていち／＼失敗をなす
徳育をなほざりにして智育のみほどこそ今の學に世亂す
今の世は學さへあればよきものと思ふは昭和の痛にぞありける
世の中の心臓痙攣を悟らずに經濟痛を癒せんと金解
動三等三萬圓の相場ぞと聞いて今更あきれる國民

○よべのつゞき萩をよめる

夕さりて虫の音しげき神苑に月の露をばうけて萩咲く
紫に咲き亂れたる萩むらを吹き亂しゆく野邊の秋風

虫の音をかゝへて咲ける萩むらを惜しや散らすか秋の夕風
宮城野の萩の梢に玉の露宿して清き夕月夜かな
山の井の水紫にそみながら夕風に散る秋萩の花
玉の井の水汲む袖にふりかゝる萩の玉露かぐはしきかな
その君と山の庵にこもり居て匂へる萩の花見つるかな
友垣に誘はれしまゝやむを得ず宮城野の萩今日も見しかな
散りはつるまで旅立ちをのばし見ん秋の主の庭の白萩
月冴えて妹とぞみつる白萩の色しる／＼と面にはゆるも
萩の花散るまでみつる老いの身の秋は樂しも一つ家の軒

その君に贈らんとして吾が庭の白萩の枝をりてもみつる
大根の島おひくひらかれて萩生稀なる宮城野の原
水清き萩の玉川月冴えて流るゝ花のかんばしきかな
萩匂ふ野路の玉川たまさかにいたりて見れば月の露てる
白萩を折る袖匂ふ月の夜に君しあらばとあこがれしかな
わが庭の白萩の花咲きしより月なき夜半もさすらひて見し
庭萩の咲き初めしよりぼんぼりを一つふやして毎夜眺むる
夕あらし吹きそよぐなり玉川の岸べの萩は散りにけむかも
庭の面に初霜おきて秋萩の花も少くなりけるかな

秋雨の降るから小野の萩原の花亂れつゝ風冷えわたる
くれだけの伏見の里の朝ぼらけしるゝ匂ふ野邊の萩むら
たそがれて山路をゆけば花薄しるゝまねく萩は淋しき
積山つみやまの尾の上に夕べの風うけてかすかになびく糸すゝき哉
しのすゝき茂る根本に松虫のひそみてなくや萩の夕ぐれ
たそがれの小池のべにたわくゝと風になびけるはだすゝきかな
武藏野に誰をまねくか黄昏の空に尾花の末なびくなり
何人をまねくなるらん武藏野のさみしき野邊にそよぐ尾花は

○作歌薄の部

陣のべに夕ぐれまねくほすゝきの手ぶりあやしく秋風のたつ
まよ風吹くがまに／＼月の露うけてみだるゝむらすゝき哉
露にふす尾花の末にひら／＼と風いたましく秋の蝶舞ふ
朝露に匂ふ尾花の末重くうつぶしてあり夜あらしのあと
風たちてまねく尾花のすがしさに月もくだりて玉をかざせり
小山田の霜穂は露にかたむきて風に匂へる初尾花かな
たそがれて尾花がまねく袖の露ぬるゝ夕べや人の戀しき
ほすゝきに夕べの露をむすばせて月さえ渡る信濃路の空
穂にはまだならぬすゝきの末の露拂ふ初秋の風のすゞしき

小倉山峯のすゝきは露ながら秋をふくみて夕ぐれにけり
打ち靡く穂末の薄露づきて虫の音ゆゆる月の夜半哉
秋の野の薄の穂なみ揺らぎつゝ渡り行くかな雁船の棹
くれてゆく秋の光は向つ山なびく薄の穂に出づる哉
しと／＼と雨ふりしきり篠薄穂に出づる秋は物の悲しき
篠薄穂に出で招く夕まぐれ人松虫の聲も悲しき
秋深み野原の薄うらぶれてなくこほろぎの聲も悲しき
夕日影入野の薄雨はれて月にかゞよふ露の玉哉
向つ山麓の薄風立ちて尾花亂るゝ晩秋の空

日は西に片山海虫の音をいだきて秋の夜更けわたりけり
思ふどち外山の薄分け行けば飛び出しけり 兔三つ四つ
我庭の一むらすゝきうなかふし雨になやめる夕べさびしも
我庭の一本すゝき露の玉照らす月夜は物床しけれ
枯れ果てしすぐるの薄風立ちて浮塵子の如くに散る夕べ哉
秋風や招く薄の下蔭に人まつ虫の啼く音訝えたり
一つ家の庭の小薄露おきて月にかゝよふ夕べ清しき
山の尾にすゝきおしなみ鳴く鹿の聲に更けゆく秋の色かな
乙女子が初花薄穂をゆきてひれ振る夕べ未だ風暑し

野に匂ふ初穂のすゝき手折り来て奥都城にます母に捧げん
日に月にます穂の薄風を痛み露にたふるゝ風情さびしも
浅茅原しののをすゝき別けゆけば我が袖ぬらす露の玉だれ
穂にはまだならねど庭の篠薄露のま玉をかざす清しき
黄昏れて小薄何を招けるか白ゆう尾花うちなびくなり
闇の夜に尾花や誰を招くらん人らしきものあらぬ此夜に
秋深み夜の風のつよければ向つ岸邊に尾花片よる
きりくすつかみとらんと静ゆけば尾花が袖にかくれける哉
月の夜誰がふる袖ぞと近よれば風に靡ける尾花なりけり

朝夕に打ちふる袖の敷そふる苑の穂薄賑はしきかな
穂薄の花の盛りの庭ゆけば柔らにふるゝ眞袖おぼゆる
誰を招く袂なるらん水すめる夕べの池の面立つや穂薄
茂り合ふ草の袂に包まれて一本芒かすかに匂へり
ふく風に片よりなびく穂薄のかげも淋しき秋の夕暮
雨齊の露にもなびく穂薄はこゝろやさしき乙女に似し哉
しぐれけり晴れけり秋風立ちにけり野邊の薄もなびき伏すなり
夜嵐の強き力に耐へかねてあはれ片よる庭の穂薄
穂に出でゝ風のまゝなる篠薄かり残されし夕べ淋しも

露に伏す雨の夕べの穂薄を手折らんとしてぬるゝ袖かな
朝霧の露にぬれたる篠薄わけゆく袖の重くもある哉
朝雨の露もたまらぬ穂薄は秋吹く風のすさびなるらん
白露のかゞやくあした野路ゆけば穂薄の上に秋は深めり
秋深み夕露繁き野路行けば風に亂れし薄の一むら
草の葉におく露しげき夕まぐれ月に伏しつゝ尾花さゝやく
あらゝぎに置く露はらふ夕風をあやしてなびく穂薄のむれ
うなかぶし涙の露のしたるかと思はるゝかな穂薄の雨
英雄が夢の上野の篠薄そよがして吹く小夜嵐哉

木枯に吹きまぐられし穂薄の秋の末野に靡くあはれさ
ゆく秋をひとりしめ野の穂薄のうちふるまゝに鈴虫のなく
仇野あだしのの露の薄のむら／＼を永久とこほろぎの住家とこほろぎの啼く
ゆく秋の野邊の往來の袖すりて尾花は我を打ち招くなり
三笠山麓の野邊に月冴えてしろ／＼なびく穂薄の花
風そよぐ夕べの穂薄うなだれていくたび岡べに袖すりをする
吹く風もなぎさの岡に佇める尾花の末の高くもある哉
秋深み穂薄の上に夕づく日入江の影の長くもあるかな
川岸に生ふる尾花のしろ／＼と水鏡見る晩秋の空

故郷の尾花が露に光る月をしのぶも淋し秋の夕暮
月のもる荒れたる宿のかた庭に秋をさびしく枯尾花立つ
枯尾花道のゆくてをふさぎつゝ秋足まとふ夕べ淋しも
夕まぐれ道ゆきすりの篠薄葉末の露に我袖ぬれたり
朝まだき行き交ふ人の袖ひたしもろくも散りぬ小薄の露
行く秋の心と人を訪ひゆけば尾花は道をせきて亂るゝ
淺茅原尾花の露をかきわけて慰しき人に通ひし吾かな
尾花咲く夜の山路をわけ来る人の心はたいにはあらし
情こころなき尾花は風にさそはれていづらともなく打ち靡くなり

月冴ゆる夕べの風に打ち靡く庭のすゝきのうらなくもがな
 木枯に吹きしばかれて倒れ伏す尾花の秋はわびしかりけり
 我庭の葉にせんと妹のいへどかるゝおもひて植ゑてだにみじ
 月光もすまの上野の山影に匂ふ薄のしとやかなるかな
 夕日影片岡の山にかくろひていよゝ／＼高し穂薄の藪
 小倉山峯の薄に月冴えて夜は深みつゝ秋風渡る
 月を待つ眞野の入江の篠薄露の命の惜まるゝ哉
 津の國の昆陽野の薄月冴えて葉末にすだくこほろぎの聲
 山づみの神のはゝきか穂薄の風のまに／＼裾拂ふなり

男てふ男の中に男なき浮世なりせばひとり住みてむ
 なよ竹の節々弱きやさすがた見れば男の子のうとまるゝかな
 髯ばかり男の子なれども魂は女に劣る昭和青年
 手と足は入日の如く長くして頭と腹のなき男の子かな
 文藝の都に明光刺す眞如(冠句追加)
 良くなつてからなら誰も寄つて来る
 とん／＼と瑞月が踏む雲の橋

武月十六日

武月十六日

九月十六日

於 明 光 殿

朝霧の天の岩座押し開き虫の音ながら日は昇りけり
 神苑に曉を松虫の樂鶏の音ながら出でます日の神
 東の山の伊保理を掻き別けて神苑豊に昇る日の神
 朝雨を清く晴らして天津日は明光殿にかゞやき昇れり
 朝の日は明光殿に直刺して鶏は唄へり虫の音流れり

○明光社月並冠句並に和歌の追加

さつぱりと探になつたしかた無く
 そろくくと姑の氣地がはげ出だし
 そろくと嫁のお尻も重くなり
 せきこんで濡れると直にかけり足
 飛んで行く世界を股にツエツベリン
 蔓延つて世を亂し行く曲の教
 程の良い歳には天窓光り出し
 まん丸に月にほゝ笑むお龜づら
 笑ふてる丁稚が締めた依細
 賣物股にかくした山の神
 判らない誠か嘘かずるい奴